
ネギま！～海の秘宝を宿し者～

螺旋剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！〜海の秘宝を宿し者〜

【Nコード】

N9943J

【作者名】

螺旋剣

【あらすじ】

神様の趣味のためネギま！の世界に転生！！悪魔の実の力でやりたいほうだい？

主人公最強系ですので嫌いな方は戻るを押ししてください。

また初心者ですので読みづらいと思えますがそのことお願ひしませぬ。

プロローグ

「どこどこだ？」

辺りを見回すと真っ白だった。

・・・・・・？

「あれ？確か家で寝たはずなんだけどな……？」

「お答えしましょう！」

ビクッ！！

いきなり目の前に女性が立っていた。

「どちらさまでしょうか？」

いや、わかってはいるんですよ。なんたって頭の上に輪っばいのあるし背中に白い羽があるんですから。でも認めたく無いんですよ。あの、ほら、ねえ。

「天使です。因みに神様の補佐です。序列は低いんですけどね。」

Orz

「つかぬ事をお伺いしたいのですが、僕って死にました？」

「はい。素晴らしい状況把握です。貴方は死にました。死因は一酸

化炭素中毒です。家が火事になって気付かずそのままポツクリです。

「それで火事に気付かずポツクリ逝ってしまった僕に何用でござい
まするか。」

言葉がおかしい気がするけど気にしない。

「実は神様から貴方を転生させるように言われたのよ。」

……！

あれか？二次小説によくある、間違っちゃったよゴメンね、タイプか？

「あつ、因みに寿命ですよ。貴方は火事で死ぬ、それが必然だった
のです。」

O r z

「さて、それじゃあ神様からの伝言よ。『ワシの二次小説の題材に
なってくれんかのう。最近閃きが無くてのう。そこで君の出番じゃ。
丁度困っていたところで君が死んだので、君を異世界に送りそれを
元に書いてみようと思う。安心して良いぞ。特典は3個じゃ。それ
とは別に行く世界は君が決めてよいぞ、できればネギま！か、ゼロ
魔にしてほしいのう。好きじゃからな。後は天使にでもきいとくれ。
よい転生をby神』以上です。」

なんつう適当な……

特典があるだけましか、三つ何にしよう。

「特典決まりましたか？」

うん、あれか？いや、ありきたりだしな・・・よしっ！

「一つ目！ワンピースの技術、悪魔の実を全部使用出来るように。つまりところワンピース内で出来ることは全部出来るようになって。二つ目！Fateのギルガメッシュの王の財宝（ゲート オブ バビロン）。ワンピース内の武器とかも全部入れといて。三つ目！不老で容姿はリボーンのボンゴレ初代雲の守護者のアラウディで。」

「えーとですね・・・二つ目と三つ目は簡単ですね。問題は一つ目ですね、悪魔の実の一つの身体に一つですからね。」

駄目か？でも色々と使いたいんだよね・・・！！

「じゃあ腕輪を作って全部封印して実の名前を言って使えるようにして違うのを使うときは再度封印するようにするのは？一種のアーティファクトって感じで。」

「それなら何とかかなりそうですね。それでは行く世界はどうしますか？」

「じゃあネギま！で。大戦初期頃でおねがいします。」

「はいっ、それでは行ってらっしゃい。」

天使がそついうと光に包まれた。

出会い

く?????side

「あああああああああ」

只今絶賛落下中です。どんどん地面がつて死ぬ！
なんかないのか……！！あつた！腕輪！はっ！使い方わからね。
のむさん。あつ間違えた。

「ロード・ゴムゴム」

ドスンッ！

……………

side end

くナギside

俺はナギ・スプリングフィールド。世界最強の魔法使いだぜ！

「自称ですけどね。ふふふ。」

うるせえぞ、アル！つつつか心読むなよ。

「いえいえ、貴方の考えていることなんてまるわかりですよ。」

こわっ！

さっきから心の声に返事をしてるのはアルビレオ・イマ。いつもロ
ーブを羽織っていてしょっちゅう笑みを浮かべてる。高位の魔法使
いで重力魔法が得意だ。

「ナギ、次はどこ行くんだ？」

「最近オステイアの辺りがきな臭いらしいからそこらかな。」

今話しかけてきたのは青山詠春。京都神鳴流の剣士でムツツリスケ
べだ。

「おい、ナギ。」

「ん？つぶは！何しやがる！！」

「急に殴らなければならぬ気がした。」

あゝイッテ。詠春のやるゝ気をこめて殴りやがって。

…あ………あああ……

ん？

……ああああああアアア！

「ナギ！下がって！」

ドスンッ！……………

あぶねえ、アルの言葉に従ってなかったら俺に命中してたぜ。

「無事ですか？ナギ？」

「あつ当たり前だろ。俺を誰だと思ってやがる。」

「フッフ、そうでしたね。」

にしてもこれ一体どういうことだ？地面に人が生えてるんだけど……よしっ！取りあえず抜いてみつか。にしてもあれだけの勢いで地面にぶつかってよく死んでないな、足ピクピクしてるし。

「おいナギ、どうする？」

「抜く。でもって俺らの敵じゃなかったら仲間に加えたい。」

「本気か？明らかに怪しいんだが？刺客かもしれないぞ？」

刺客だったらマヌケ過ぎるだろ それにこのままだと窒息死するだろうっし。いきなり空から落ちてきて埋まるなんて面白過ぎるだろ。一緒にいたらぜったい楽しくなる。

「なんか怪しい動きしたらよろしく、アル。」

「フフ」

せいのっ！

びよ~~~~~ん

「「「！「「「」

バチンッ！グシヤッ！

ビックリして手離しちまった。アルも驚いて特大重力魔法使ったし、危うく巻き込まれるっこだったぜ。

「……ド」

ん？

「……ボ……」

ドッガン！

ぶへっ、ごぼっごぼっ

急に爆発おこして砂煙がまった。

いったいなんだ？爆弾でも持ってたのかあいつ？

「げぼっげぼっ。あゝひどいめにあつた。」

！！！！？？？

生きてた！！

〈ナギside end〉

〈????side〉

グシャツ！ アルの魔法

ごふっ…

………はっ、オレどうなったんだ？……死んで……天使に
会って……転生さしてもらって……上空から落下……地面に激突
口の中に土があるから地面に埋まってんのかな？
取りあえず脱出するか。生きてるってことは腕輪の使い方はあつて
たんだよな。

「ロード・ボムボム」

「全身起爆」

ドッカーン！

「げほっげほっ。あゝひどいめにあつた。」

少したつと土埃がはれてきた。

「てめえ！なにもんだ！」

んあ？おおっ、赤みがかつた茶髪で生意気そうながキ。ナギ・スプ
リングフィールドじゃないか。更にアルビレオ・イマに近衛詠春ま
で…

ってなんで皆さん構えてるの!?!殺気飛ばさないで下さい。怖いです ヒィィ

「おいつ聞いてんのか?」

「はっはい。何でしょう?」

どもった、恥ずつ。

「テメエはなにもんだ」

「え〜と・・・ちよつと特殊体質の人間?」

「特殊体質?身体が伸びるのがそうか?」

「まあ、そのほかにも多々在るけど。」

あれ?詠春とアルビレオからの殺気が増したよ?これって死亡フラグ?

「あんたは俺達を殺しに来たのか?」

「いや違つぞ。というか此処は何処?そしてあなたたちはどちら様?」

「此処は魔法世界のシルチス亜大陸で、私達は、紅き翼アラルブラですよ。」

アルビレオ・イマが答えてくれた。魔法世界と紅き翼は漫画知識で知ってるけどシルチス亜大陸ってどこよ?

「魔法世界？紅き翼？イタリアじゃねえの？つつか魔法！？」

イタリアって言ったのはノリです（笑）

「んなことは後で聞けば良いんだよ！そんなことよりお前俺達の仲間になれ！」

……………は？

「マジ？」

「本気と書いてマジだ！」

願ってもないことだけど、取りあえず後の二人・詠春は溜め息ついてうなだれてる。アルビレオ・イマは「フフフ」って笑ってる。

「え〜とそちらのお二人は？」

言うことはなんとなく分かってるけど一応聞く。

「フフフ、私は構いませんよ。」

「はあ〜言っても聞かないだろ。好きにしる。ただし何かあったら即斬るぞ。」

「え〜とでは、よろしくお願いします。行く当てもなさそうですし。」

「おつっ、俺はナギ・スプリングフィールド。ナギでいいぜ。」

「アルビレオ・イマといいます。アルでいいですよ。」

「青山詠春だ。よろしく。」

「あと1人いるんだけど後で紹介するぜ」

後一人ってゼクトかな？

詠春まだ苗字「青山」なんだ。

あっ名前どうすっかな、……よしっ外人っぽく

「レオン・D・オルレアン。レオンって呼んでくれ。これからよろしく。」

オレは3人と握手した。

レオンside ends

出会い（後書き）

主人公の名前悩みました。
自分の文才のなさに落胆

オステイア

くアルビレオ side

先日仲間になったレオンの話は非常に興味深いですね、フフフ。彼の話によると異なる世界から知人に飛ばされたとのこと。しかも特殊能力をつけて。なにやら服のポケットに手紙が入ってたらしく読んだ後うなだれてました。

能力は、なんでも様々な悪魔の力を引き出すのと、異空間の武器庫ですね。武器庫は食料も入るようですね腐らないようですよ。ちなみにいま私達はウエスペルタイア王国の王都オステイアに最速で向かっています。ヘラス帝国が攻めて来たようので一刻を争うですよ。

くアルビレオ side end

くレオン side

ども、先日紅き翼^{アラルプラ}に入ったレオンです。あのあとポケットから手紙が見つかったんだけどさ・・・内容が

『言い忘れてたんですけど悪魔の実の能力を使うときは「ロード・メラメラ」のようにロードの後に実の名前を言ってね。動物系^{ソオン}の場合は「ロード・ネコネコ：モデル・レオパド」のようにモデルも言ってね。ホルホルの実で改造した効果は別の実を使っても消えません。』

先に言えよ！危うく転生して数十秒で死ぬところだったぞ、コラ！

『次に王の財宝は念じれば使えるよ、武器は勝手に回収されるからほっといてもOK！真名解放は不可です。凄い武器、もしくは観賞用に使ってください。食料庫としての使用がベストかと。ではでは。』

まあ手荷物が無くなるからこれもOK
ん？もう一枚あんのか？

『追伸 魔力はナギと同じくらいです。気は大人タカミチと同じくらいです、気は鍛えれば更に多くなるのでガンバってね。覇気もちゃんと使えるよ。魔法も覚えれば使えるようになりますよ。あつ、悪魔の実を使ってなくてもカナヅチだから気をつけてね。貴方を見守る？天使より。』
だつてさ。

“ or z
使用中はカナヅチ覚悟だつたがまさか不使用でもカナヅチとは…どうにかなるわな

で、今ウエスペルタティア王国に向かつてる。ウエスペルタティア王国ってアリカ姫とアスナいるんじゃないかな？ヘラス帝国が攻めて来たらしい。さっきから遠くで派手な音が聞こえてる。ナギがとばすせいで追い付くのが大変です。話してる最中に目視できるまでに近づいてた。

「アル！詠春！レオン！急ぐぞ！」

初戦闘頑張ります。

レオン side end

ナギ side

ズシャアアアッ

「くっ、遅かったか」

戦火がかなり広がってやがる

「急ぐぞ！」

ドカンッ！ズバンッ！ドンッ！！ボキユ ガキユ バキユ

俺達は敵を排除しながら戦闘の中心へと向かっていく。

「ナギ、正面にある鬼神兵が集まっている塔に向かってください。そこに黄昏の姫御子がいるはずですよ。」

あそこか。

「おう！レオンっ遅れんなよ」

俺達の仲間ならこれぐらい出来なきゃな、レオンの実力見定めてやるぜー！

くナギ side ends

くレオン side

「うらあ」

ドンッ!!

ナギが塔に近づいた鬼神兵をパンチで真っ二つにした・・・バグめ・・・

「そんなガキ引つ張り出すまでもねえよ、後は俺達に任せな。」

「おっお前は・・・！紅き翼の・・・千の呪文の！」

アスナちゃんの側にいた神官？が驚いてる。つか二つ名もつあるんだな。

「そう！！ナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンドマスター！！！」

うわっ恥ずっ！

「自分で言ったよコイツ・・・」

「フッフ、ノリノリですね」

そういつつも二人とも戦闘モードですね。

オレも初陣をはたしますか。

「アル、詠春、ナギ、鬼神兵ってやつオレがやってもいいか？」

「できんのか？」

「三人ともオレの能力ちから気になるだろ？」

「いいですよ。討ち漏らしは掃除してあげますよ。」

「助かる。じゃあ行ってきます。」

オレは鬼神兵の前に飛び出す。

「ロード・ゴムゴム」

『ギア3rd・骨風船』

オレは指から空気を吹き込み腕を巨大化させる。そこから空気を足に送り横に薙ぎ払った。

『ゴムゴムの…』

おらっ吹っ飛べ！

『ギガント・ウイップ
巨人の鞭』

ドギョワン！！

振り抜いた足から腕に空気を戻し回転をつけて殴りつけた。

『ゴムゴムの…』

『ギガント・ライフル
巨人の回転弾』

ゴグワワン！！

うしっ近くにいたやつは倒したな。一瞬反動で小さくなったけどすぐ戻った。

「どうよ。」

塔に戻り見ていたナギ達に話しかける。

「やっぱり仲間にして正解だったぜ。」

「フッフ、貴方もバグキャラですか」

「でかくなったり小さくなったり…」

満足してくれてよかったぜ。
詠春悩みすぎは髪に悪いぞ。

レオン side end

くナギ side

レオンは大丈夫だな。予想外に強いわ。まっ俺の仲間なら当然だけどな。

「安心しな俺達が全て終わらせてやる。」

「なっ、しかし お前達に何が出来るというんだ！？敵の数を見る！」

この神官？さっきの見てなかったのかよ…

「俺を誰だと思っていやがるジジイ、俺は最強の魔法使いだ。まあ学校は中退だがな」

ふわり

近くにアル達が降りてきた。

「あんちよこ見ながら呪文唱えてるあなたがいつでも説得力有りませんね、フフフ」

「うるせえよ。だから中退つったろ」

ジャラララ

ん？この子が黄昏の姫御子か？

「嬢ちゃん名前は？」

「アスナ…アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

24文字かよ

「なげーなオイ、けど…アスナか、いい名前だ。よっしゃアスナ待ってな」

さっさと片付けるかね。

「アル！詠春！レオン！いくぞ 敵は雑魚ばっかだ行動不能で充分だぜ」

「クスクス、はいはい」

「やれやれ、雑魚でも数はシャレにならないぞ。」

「りょ〜かい。」

^{アラルブラ}紅き翼出勤だぜ！

くナギ side ends

オステイア（後書き）

なんとも言えません。文章がちやちい。詠春空気…

ラカン登場！

レオン side

どもレオンです。オスティア襲撃から二週間がたちました。敵はヒエヒエの実で凍らせたり、黒刀「夜」で斬ったりして撃退した。一週間くらい殺した人が夢に出てきてひどかった。

で、一週間程前にゼクトを紹介されました。別行動してたらしい。オレは魔法覚えたかったから弟子入りさせてもらいました。弟子入りしてからずっと魔法の練習と悪魔の実際の能力の把握してます。

自然系や一部の超人系パルミアの時に魔法でどれくらいダメージ喰らうか知りたい、確かめないで使つて大ダメージ喰らうとかしたくないし。

肝心の魔法はまず障壁と浮遊術を教わった。

これはダメージを軽減すると、月歩げっぽうで一々空気蹴ってるのが面倒から。フワフワの実使えば受けるけど攻撃手段が減っちゃうからな。月歩のこと教えたなら「おぬしバカじゃろ」「フッフ人間じゃ在りませんね」ってゼクトとアルに言われた。

攻撃用の魔法（魔法の射手など）は超人系と動物系の時は水系以外平均的な威力らしいが…水系は悪魔の実際の性質カナツチのせいか極端に威力が低い…。

問題は自然系状態ロキアのときだ・・・これは実によって特化してることがわかった。ヒエヒエなら氷雪系、メラメラなら炎熱系、ゴロゴロなら雷と風系、ピカピカなら光系、ヤミヤミなら闇系、てな感じだ。大体1.5〜2倍の威力になる（魔法の射手で検証）更に威力が上がる可能性もあるらしい。例外でカゲカゲの実は超人系でも影魔法

に特化してた。

ヤミヤミの实の能力で相手に触ってる間、相手の悪魔の实の能力を封じる能力あったから試してみたんだけど、結果から言えば成功だった。魔法は勿論（ナギで確認）気も使えなかった（詠春で確認）欠点は完璧な個人戦：周囲に相手以外いない状態：でない仲間やその他の人の技や魔法が闇の引力でオレに全部当たる。威力倍増、障壁もあんま効果なし。

試しに魔法の射手（弱）を近くから明後日の方向に撃ってもらったらずぐUターンしてオレに当たった。すごく痛かった（涙）

ゼクト、アル、詠春の協力のもと多数の検証の結果、ロギア系のときはほとんどの攻撃を受け流すことが出来た。神鳴流の斬魔剣のみまともにダメージを受けた。死ぬかと思った…。

パラミアのバラバラの实は斬魔剣も効かなかったけど分裂してる間に殴られた。

神鳴流剣士にあつたら剣で対抗することにする。

ゴムゴムの実は雷系呪文は一切効かなかった。ナギの天敵になった。あいつ雷系以外ほとんど使わないから…

まだ試してない実の能力沢山有るけど取りあえず終わりになった。

だって！！実の種類多過ぎなんだもん！！！！

これで晴れてアルと詠春、ゼクトからバグキャラ指定を受けた。

現在は森林地帯にあるちょっと拓けた所で食事の準備しています。詠春が鍋の用意してるから食べてる最中にでもラカンが乱入してくるとおもわれる。

「のうれオン」

「なんすか先生？」

詠春の準備が終わるのを待っているとゼクトに話し掛けられた。ナギが師匠って呼んでるからオレは先生って呼ぶことにした。

「おぬしもそろそろ始動キーを考えたらどうかの？」

えっ？

「早くないですか？まだ「白き雷」すらまともには無理ですよ？」

実際問題、魔法の射手を^{サキタ・マギカ}27矢が限界です・・・

「ふむ・・始動キーを決めれば魔力コントロールがやりやすくなるからの魔力はナギ並にあるのじゃから必ず出来るようになるぞ」

「んゝ、いいの全然思いつかない……」

「なに慌てなくてよいぞ 時間はある」

悩むなゝゝ

原作の皆さんの始動キーってうまく出来てるよなゝ語呂が良い。
パクっちゃダメかな？（笑）

「肉捕ってきたぞ」

しばらくするとナギが^{トカゲ}蜥蜴を持ってきた。ホントは牛肉か豚肉が良かったけど無いので妥協。

鍋を囲んで食事開始。

鍋の中には豆腐と昆布が入ってます。

「へ〜これが旧世界の日本の鍋か。美味そうだな〜、肉肉〜。」

あっナギいきなり肉はねえよ！

「蜥蜴の肉でも旨いのかの？」

先生まで！

「こらナギっ！！いきなり肉入れるなよ。こつというのは火の通る時間差があつてだなあ…。」

その通りだよ詠春！日本人としては譲れないものがあるよね。

でもオレは・・・

「肉肉〜」

肉が大好きなので食べます！

「あっレオンまで……。」

「さっきからうるせーよ詠春」

主にお前のせいだぞナギ・・・

「フッフ、知ってますよ詠春。貴方のような人を鍋將軍と呼ぶそう

ですね」

「ナベ・シヨウグン!？」

いやいや鍋奉行でしょ、アル、ナギ、先生、心の中で突っ込む。勿論箸は休めません、モグモグ。

「っ、強そうじゃな」

「詠春負けたよ。今日からお前が鍋將軍だ」

「うむ、任せる好きにするがよい」

旨いな〜この蜥蜴の肉。よい具合に脂がのってて。モグモグ

「アル、こちら辺もう煮えてるぞ」

「これは美味しそうですね」

「（鍋奉行じゃないのか？）うれしくないな〜」

〜数分後〜

「まだか詠春？」

「まだダメだ」

.....

「もういいか？」

「もうちょつとだ」

「ダー！！詠春いい加減食わせるよ！！」

詠春から鍋の食事許可が出ないのでナギが叫んだ。

ナギは忍耐が足りないな。血圧上がるよ？十代で高血圧は良くないぞ？

「お前らが全て任せると言ったんだろ 後少し待て！」

「うるせえ 俺は食う！」

ガキッ

ナギの箸を詠春の箸が止めてる。背後に龍虎が見える。

「先生、アル、二人はほつといても食べましょ。」

ヒョイッ モグモグ

「そうじゃな それにしてもこのソースは旨いの〜」

ヒョイッ モグモグ

「ええ 実に美味しいですね 肉によく合いますね」

ヒョイッ モグモグ

「日本の醤油だよな。うん！旨い！！」

「あゝお前らなに食ってんだよ！」

大声出すなよ、うるさい。

「ほれ、お前の分。」

「さすがレオン！」

なにがさすがかしらんけどな

く更に数分経過く

「姫子ちゃんにも食わせてあげてーなー」

ナギが肉をパクつきながらそんなこと言ってきた。

このあとラカンの乱入があつて鍋が吹っ飛ぶからさっさと食べよつと…モグモグ、モキユモキユ

「姫子？ああ、黄昏の姫御子じゃな」

「世界を見せてやりたいよな、まあまずは戦争をどうにかしないとな。」

「レオンの言うとおりです

戦争が終われば彼女を自由にする機

会もあるでしょう」

もうそろそろでラカンの剣が降って来るな。

「しかしこの戦争は解せん」

「なにがだ詠春？」

「お前が言っただんたる鳥頭」

！！来る！！

ドカンっ！！

パシッ パシパシッ

ヒョイッ ヒョイヒョイッ

バシッ バシバシッ

オレは予め器に取っただけだから避けるだけだったけど、ナギ、アル、先生の三人は吹っ飛んだ鍋から飛んだ肉を空中でキャッチしてた。一瞬手が見えなくなるぐらい素早く動いてたのに汁の一滴零さずに・・・

「お食事中失礼」 おれは傭兵剣士のジャック・ラカン！」

失礼だと思っただけなら待ってるよ。

崖の上から高らかに名乗りをあげたラカン、思っただけでラカンの服装って独特だね・・・

「何じゃ？あのバカは」

んぐ

「帝国のってわけじゃなさそうだな」

モグモグ

先生とナギが話してるけど食いながらだから緊張感ゼロだな！

「えいs・・・ぬお!？」

詠春は・・・鍋被ってました。ええ見事なくらい

「フ…フフ フフフ」

コワッ！鍋被った男性が箸と器持って震えてる

「あの〜詠春 さん？」

思わずさんづけで呼んでしまうほどの威圧感、仲間になってから初めてだ。

「食べ物を粗末にするやつは…」

スパンツ

「斬る!」

はやっ！

ギギャツ バカツ ズバン

「おお、詠春の攻撃を凌いでるよ…」

「やりますね あの男ちょっと前に南で話題になった剣闘士ですよ」

バキンッ ガキン ドカン

「うわ〜よくもつな〜」

「フッフ、詠春は貴方の天敵ですからねレオン」

「神鳴流・・斬魔剣が天敵なだけで詠春自体は天敵じゃねえ。」

「あっ」

ラカンが取りだした人造精霊？（服装はニーソックスと指先から二の腕まである手袋のみ）に負けた。
ホントお色気に弱いな。

ゴガンッ

詠春がやられた瞬間飛び出していったナギの魔法がラカンに向かっていたけどラカンはスピンしながら跳んで避けた。すげえな回転・・真央ちゃんもびっくりだよ。

「おめえら手出すなよ」

「もちろんですよ」

「バカの相手はバカが一番じゃ」

「テキトーにガンバ」

で、始まったナギVSラカンなんだが・・・自然破壊し過ぎだろ！
！一回の攻撃で木が十数本吹っ飛ぶってやり過ぎだろ！ 人のこと
言えません

「そつえばレオン、貴方に聞きたいことが有るのですが？」

観戦中にアルが話しかけてきた。

「ん？なに？」

「何でわざわざ魔法習ってるのですか？貴方の能力・・・悪魔の実で
したか？そちらだけでも充分だと思いますが・・・」

「うむ、わしも気にはなっていた。充分強いじゃろ。まあバカ弟子
一号に比べてちゃんと順を追って覚えてくれるから教えてて嬉しい
がの、呪文も暗記できとるし」

なんでもナギは大バカな天才型でオレは努力型らしい、ナギは階段
を数段飛ばしでのぼるタイプでオレは一段一段のぼるタイプらしい

「理由としては、悪魔の実基本対人の方が強いし手札は多い方が
良いと思うから、対軍は魔法の方が使い勝手がいい気がするし。」

「確かに千の雷や燃える天空は対軍魔法ですからね。ナギはさつきから千の雷を個人に使ってますがね」

そう、さつきからゴロゴロ、ゴロゴロうっせえんだよ！

「あと防御と補助魔法が使いたいからね。障壁や転移、治癒それに結界、認識阻害とか能力になくて役にたつのもあるし。」

「確かにのう。おぬしの能力は攻撃に特化しとるようじゃしな」

まあなんたって悪魔の力ですから。

「ところでアル、あの二人はどれくらいやれば終わるの？」

崖が崩れたり、クレーター作ったり、木を吹き飛ばしたり、ほつとくこのあたりをさら地にしそうな勢いだ。

「では後5時間ほどしても決着が着かないようなら止めて下さい。やり方は任せます」

なにで止めようかな

レオン side end

ラカン登場！（後書き）

悪魔の実の能力や技は詳しくはウィキペディアで調べてください。

紅き翼 躍進

ラカン side

よーやるうども、俺様は最強の傭兵剣士ジャック・ラカンだ！

実は俺は今紅き翼^{アラルフラ}、つまりあのくそ生意気なガキであるナギ・スプリングフィールドの仲間ってわけだ。

え？さつきまで戦ってたろって？さつきまでってのはよくわからねえが確かに戦ったぜ。確か合計四回だな。まあ戦ってる内に気があつちまつて仲間になった。

それに俺様と互角が2人もいるんだぜ面白過ぎだぜ！

しかしあれは無いぜ…

毎回ナギのやるうと戦ってたんだが時間がかかりすぎるとナギもろとも攻撃を受けて物理的に中断させられた…

一回目…二人していきなり闇の中には引きずり込まれた。いくらもがいても抜け出せず真つ暗闇の中に丸一日閉じ込められた…五感が全て封じられてしかも眠ることも出来なかった正直生きてる心地がしなかった、出れたときは生きてることに感謝した。

二回目…干からびさせられた…水が欲しかった…ただただ水が欲しかった…

三回目…身体をバラバラにさせられた。なんかに囲まれて次の瞬間俺とナギの身体がバラバラになった。ナギの顔が俺の胴体にのつてたり脚の長さが二人分になったりした。

四回目・・・一番思い出したくねえ、人生で最悪な日だった。俺ら二人とも女になった…: 比喩じゃなくて…: 俺の息子が無くなったし、身体も丸みを帯び、声も高くなった、身体は一回り小さくなった。ナギも同じようになつてた。元に戻れたときは泣いて喜んだ。自分の身体って素晴らしい。

そのあと奴らの仲間になつて戦争に参加してゐるって訳だ。

ラカン side end

レオン side

ラカンの襲撃は四回にわたつた。といつても毎回ナギが突っ込んでつてオレやアル、先生、詠春はほとんど戦つてない。最後はオレが二人を攻撃して終わらせた。

一回目はヤミヤミの実の闇で飲み込んだ。

二回目はスナスナの実で二人の水分を吸い取つてミイラ状態にした。

三回目はヘヤヘヤの実でバラバラにした。殺してないよ。

四回目はホルホルの実で改造してやった。二人とも『エンポリオ・女ホルモン』で女にした(笑)可笑しすぎて腹筋がつるところだった。実際詠春はつった。先生とアルもかなり苦しそつた。ラカンとナギは絶望してた。クツクツクツ

その後、ラカンが仲間になりオレ達は戦場を転々とした。オレ達が強すぎるためメガロメセンブリア正規軍上層部から嫉妬されて辺境に飛ばされてたが、連合の首都メガロメセンブリアの喉元にあるグ

レート＝ブリッジを帝国に陥落させられたためオレ達は呼び戻された。そしてオレ達^{アラルブラ}紅き翼は前線に復帰して暴れ回った。

ナギは自称ではなく皆から《千の呪文の男》と呼ばれるようになった。まともに使える呪文二桁いかになくせに・・

ラカンは《千の刃》と呼ばれている。

そしてついにオレにも二つ名がついた、^{エレメンタルマスター}《森羅万象》だ、ほかに《獣王》と《超人》とかがある。それぞれ能力について仲間以外に言ったこと無いからオレの戦ってるところを見ていてそう呼んでいるらしい見事な一致だとおもつ。

グレート＝ブリッジ奪還作戦はかなりの激戦になった。

なにしろ全長三百キロの超巨大要塞だ。敵の数もハンパないし何よりなげえ、オレは最初の時にグラグラの実で『海震』を使って津波おこしたんだが・・ええ怒られましたとも、威力がハンパなかったらしく橋を半壊させたから（一キロ程）。あれかね、津波の中に氷の塊や岩石（各二メートル程）を大量にまぜたのがいけなかったかね？その後は敵艦を主に潰してました。えっ？どうやったかって？主に『火拳』『大噴火』『ゴムゴムの巨人の斧』^{キガントアックス}や鷹の目の剣技かな

この一戦で戦況は逆転し連合は躍進していった。

最近オレとナギのファンクラブが出来たらしい 前世では平凡な一般人だったためかなり嬉しかったりする。

各諸領が開戦前と同じぐらいになったときガトウとタカミチが仲間に加わった。

ガトウとオレの相性はガトウにとって最悪だった。居合い拳や豪殺居合い拳はロギア状態のオレには意味が無かった・・ちよつとガトウが凹んでた

タカミチには最初はスッゴい睨まれた。ガトウの技が効かなかったことが原因らしい。それも一週間程で他の奴らと同様に憧れの目で見られるようになった。まあ餌付けもしたがな。

「俺やレオン、詠春の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾…えと…」

「核爆弾な。」

「そう、それが開発されてこんな大戦は起きねえそうだ」

「始めたら最後…みんなまとめて滅んじまうからな…」

ナギとオレの言葉を皆は聞いている。

「この戦は何時になったら終わる？帝都を滅ぼすまでか？」

「それにこの世界にもやる気になれば核爆弾並の大魔法はある。」

「こんなこと続けて何になる！これじゃあまるで…」

「『世界を滅ぼそうとしている』ですか？」

今まで黙って聞いていたアルがナギの言いたいことを言った。

・・・

「それは間違いなさそうだぞ」

「ガトウ…」

狙ってたとしても思えないタイミングでガトウとタカミチが来た。

「奴らは連合・帝国の両中枢にまで入り込んでるようだ。秘密結社
コスモエンテレグエイア
『完全なる世界』だ」

完全なる世界・・・ね・・・

ついにあのキザやろつどもか

ネギ世代で出てくる三番目は結構好きなんだがな

レオン side end

紅き翼 躍進（後書き）

戦闘描写がないって？はい、すみません。下書きはしたのですがあまりにひどい出来だったためなしになりました。

へやへやの実はトラファルガー・ローの能力からとりました。原作で実の名前が出てないもので・

出してほしい悪魔の実や技があつたら感想にでも書いてください。出すかもしれません。

拙い文章ではありますが次回も読んでいただけると嬉しいです。

主人公の設定

主人公

名前：レオン・D・オルレアン

年齢：18〜22ぐらい？

性別：男、時々女（ホルホルの実使用）

容姿：家庭教師ヒットマンリボーンのボンゴレ初代雲の守護者のアラウディ　金髪蒼眼

能力：悪魔の実全て（二つ以上の同時使用不可、一部例外在り）

王の財宝（ゲート オブ バビロン）　真名解放は不可　ワンピース内の武器付き（和道一文字、ダイヤルなど）生き物不可　生肉や野菜果物は可

不老　　覇気　　魔法

所属：紅き翼

二つ名：

『エレメンタルマスター』　『森羅万象』　自然系ロギアから

『超人』　超人系パラミシアから

『獣王』　動物系ソオンから

『紅き翼の弾薬庫』　王の財宝から

追記：神様の二次小説の題材の為ネギまの世界に転生。神様が人材を探してるときに丁度火事で死亡したから。神様が人材を王の財宝には砲弾やガレオン船も入ってます。

主人公の設定（後書き）

追加変更するかもしれません

閑話（前書き）

ガトウとタカミチが仲間になる前です。

閑話

「先生！できません！」

「何やってるのじゃもう一回」

「・・・っ！」

「いてえ・・・」

え？なにやってるかって？

「はあなんで毎回舌を噛むんじゃ？」

呪文の早口だよ！！

「仕方ないでしょ、この量を一気に素早く噛まずに言える訳無いでしょ。」

原作の人達よく噛まないよな

しかも高位の魔法は古代ギリシア語よ？もと純日本人のオレにはかなり厳しい。

「それにしてもレオンは得て不得手が無いのじゃな、水系以外」

「それって器用貧乏っていいませんか？」

事実攻撃魔法はめっさ習得が遅い。

「なに、あのバカ弟子一号みたいにほとんど雷系しか出来んやつよりよっぽど良物件じゃよ。それにレオンは補助系魔法の方があっていろいろじゃしの、能力が攻撃に偏り過ぎとるからちよつど良いじやろ。」

「確かに治癒魔法等のほうが使いやすいですけど・・・」

治癒魔法はめきめき上達してます。

「おぬしの本質が出ているのじゃろうな」

「へ？」

本質？

「ワシらが知らないと思っておるのか？おぬし、戦の後…特におぬし自身が暴れたところに小さな墓を作って黙祷しておるじやろ」

「っ！！・・・自分が殺した人達が少しでも安らかに眠れるようにって、偽善ですが、後　　というかこっちが本命なんです、今自分がナギ達と共に連合内で英雄とかいわれてるのは戦場で死んでいった帝国の民たちがいるからで、自分は帝国の民から見れば人殺しでしかないってことを忘れないためです。」

「おぬしは後悔しとるか？」

「後悔はしてません。そのかわり覚悟してます。」

「覚悟とな？」

「自分の行動によって起こる結果を受け止める覚悟、殺す覚悟、殺される覚悟です。結果的に殺されても文句はありません。もっとも簡単に殺されるつもりはありませんけどね。」

「その覚悟があるなら大丈夫じゃ 最近はそんなこと全く考えておらん輩も大勢いる わしらの使っている力は簡単に人を殺せるということも分かってないやつらじゃ わしはレオンがちゃんと分かっている嬉しいぞ さて今日はもう終いじゃゆっくり休め」

ゼクトはそう言ってテントに戻っていった。

.....

「レオン」

「おっ！詠春良いところに！」

「嫌な予感しかしないんだが・・・」

詠春が嫌な顔して一歩後ずさった。

「刀つくつたんだよ。」

「刀？」

オレは詠春に刃の部分の無い刀、つまり持つとこしか無いやつを渡した。

「柄に刃を仕込んであってダイアルを換えると炎・電気・氷の刃を造れる」

原作であまり書かれなかったんだよね。空島編でカマキリの燃焼剣バーンブレードぐらいしか描かれてなかった気がする。

「武器に属性付加する術式あるだろ？別にダイアル使わなくても良くないか？」

「これだと魔力使わなくてもOKだし、使い方変えれば刃を飛ばしたりもできる。魔法じゃないから物理障壁じゃないと防げない。」

「うーん、だが不格好すぎるぞ」

「ダイアル結構でかいからなく、多少は目をつぶってくれ。」

ある程度の威力を出すためにはそれなりの大きさのダイアルを使わなきゃいけないのがネックだ。

「そうだ レオンの持つてる刀見せてくれないか？」

「ん？べつにいいぞ」

オレは王の財宝ゲート・オブ・パレロンから数個取りだす。

どうよこの直刃

良い造りしてるな 私の夕凧も良いだろ

使い込まれてるけどきれいだな

毎回戦の後に手入れしてるから

そうだ手入れの仕方教えてくれない？

いいぞ、まずはだな・・・

「レオン時間じゃぞ」

詠春と刀の手入れの仕方教わってたら思ったより時間が過ぎていたようだ。

「もう時間か」

「つい話し込んだじゃったな」

「また刀見せてくれないか？」

「何時でも、じゃ先生待たせると悪いから」

「魔法の練習頑張れよ」

また舌噛みそうだな…

~~~~~

「なあジャック」

「あん？なんだよナギ」

「ロギア状態のレオンに勝ちたくないか？」

「方法あんのか！？」

「いや、まだ思いつかねえ・・・」

「はあ・・・それじゃ振り返ちだ」

ナギもラカンもレオンと時々模擬戦というか勝負するのだがロギア状態のレオンの勝ちである。ゾオンやパラミシア状態だと能力にもよるがだいたい引き分けである。

「今のところ詠春しかまともに攻撃できないしな、斬魔剣とかいつ

たか？」

「それだ！」

いきなり叫んだラカンにナギがびくる。

「おい、いきなりどうした」

「これからレオンと勝負する」

「おい待てよ！」

「レオン！勝負だ！」

「ラカン、また？懲りないな、また女にするぞ。」

「フッフ、相変わらずですね」

「そうじゃな」

先生、アル止めてよ、めんどくさい。

「はっはっは、俺様に秘策有り！来れ！千の顔を持つ英雄」

アダット ホーローリス・メタ・キーロウソンボン

「で野太刀一本？・・・って野太刀？まさか！」

「そうさ、『斬魔剣・弐の太刀』でレオン、お前を斬る！」

刀をオレに向けてラカンは宣言した。

「勝手に神鳴流使って良いのか？つつか使えんの？」

「俺様に不可能はねえ」

ヤバいマジだ。原作で見様見真似でできてたんだよな

「先生も止めて下さいよ。」

このままじゃオレが斬られる！

「なに出来はせんじやろ」

「フッフ　大丈夫ですよ　万が一斬られても腕一本ぐらいなら  
すぐ治りますから」

「アルまで！？詠春！あいつを止めて！」

「大丈夫だと思つぞ。いくらあいつでも簡単には出来ないだろ。」

詠春・・・きつと神鳴流の誇り数十秒後ボツキボキに折られてるよ。

「ナギ！」

「いけ！ジャック！斬れ！」

orz

やつは聞くだけ無駄だった・・・

ラカンイメージトレーニング中

ぼくぼくぼく　ちーん

「ふうむ　よし！行くぜオラア！！」

ビシッ　ポーズの効果音

「ぎんっ」

バシッ

「まっっ」

ズビシッ

「けえ〜〜〜んっ」

ガカアッ　刃にエネルギー？がたまる音

やべえマジで成功しそうなんだけど・・・腕一本は確実かな・・・  
首に当たらなければいいけど・・・

「忒の太刀えあ！！」

ズヴァン！！

やらないよりマシか？

「障壁最大！！」

スツ・

やっぱり効果なしでした・・・さらば！！

ザシユツ

「「「「！！！！」」」」

ドサツ

「ぐっ・・・うっ・・・先・生、アル・・・早く・・・」

わかってたけどいてえ。自分で止血はしてるから血は平気だけど自分の腕が転がってるのは見たくないな。

「ジャ〜ツク、お前の勝ちだぜ！」

ナギ、お前は後でボコボコにしてやる。

「フッフ、やはりバグですね。レオン、今腕くっつけますから動かないで下さいね」

動けねえよ！

「ほんとじゃのう　ワシもやってみるかの？」

やめて先生！できちゃいそうだから

「・・・あれ？なんで？・・・斬魔剣は神鳴流でも最高難易度の技だぞ・・・見様見真似って・・・私の二年間は・・・」

あゝ詠春凹んでるよ。体育座りで暗い空気纏ってのの字書いてるよ。ラカンだから仕方ないよ。痛たたっ！アル、もっと丁寧にな・・・

~~~~~

「ふははは、ナギ今日がお前の命日だ。」

やっとラカンから受けた斬魔剣の傷が完治した。傷自体はすぐに治ったけど痛みが丸一日おさまらなかった。

「なんだよレオンいきなり」

「昨日オレの腕がラカンに斬られたとき喜んでたたる！」

斬ったラカンでさえ心配はしてくれたのに・・・

「お前は大丈夫かとも聞いてこなかった、よって非常にムカついたのでぶん殴りまくろうかと思う。」

「はっやってみやがれ」

「いくぞ、コラ！」

「ロード・ノロノロ」

「ロギアとゴム以外なら負けねえ！」『雷の投擲』！！」

『ノロノロビーム』

ぼわわわん

「な！！雷の投擲が空中で止まった！」

「このノロノロビームを浴びた物はその時点の運動エネルギーを保ったまま時間にして三十秒間動きがノロクなってしまうのだ！魔法・気弾・生物・物すべて効果がある。」

「なんだその反則能力！」

「うるせえ！」

鏡があつたらまずかつたけど、ここは野外。遠慮なくできるぜ！

『ノロノロビーム』

「いくら反則臭くても当たらなけりゃいいんだ そんなのろいビームなんかに当たるか！」

ナギは瞬動や虚空瞬動で避けながら魔法の射手や雷の投擲をはなってくる。が、オレは全部ノロノロビームでのろくして避けてる。

「ふふふ　ならこれならどうだ！」

『ノロノロビームソード』

みよ〜ん

「うお！片足だけ動かねえ」

「ナギ、お前なら死なないだろう。」

オレはきつと満面の笑みを浮かべているだろう。

『ノロノロビーム』

ぼわわわん

「な〜〜〜〜〜に〜〜〜〜〜を〜〜〜〜〜」

「ロード・ゴムゴム」

オレは足をポンプにして血流をアップさせた。

ぐぐっ・・・ギョポン！

ドルルルル・・・

『ギアセカンドー！』

『ゴムゴムの・・・』

「ヤバくね？」

「後五秒くらい」

5

4

3

2

1

ドグワフワフワフワフン！！

.....

バタッ

「ナギ！」

詠春が駆け寄る。

声をかける

返事が無い、まるで屍のようだ

「ナギ！死ぬな！」

「・・・かつ勝手に・・・殺・・・す・・・な・・・ぐふっ」

さてナギへの制裁も終わったし勉強再開！

「先生、勉強再開しましょう。」

「バカ弟子一号はアルと詠春に任せるとするかの」

調査

レオン side

現在首都メガロメセンブリアにある建物の一室にいます。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ。」

「そうだけ、最前線からだったから疲れたんだけど。」

まあアリカ姫に会えるから良いけど・・・

「そういうなレオン、ナギ。会ってほしい人がいる協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

現れたオジサンに驚くナギ達。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。ウエスペルタティア
王国女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下だ」

ひゅ〜

未来のナギの嫁、ネギの母であるアリカ姫にあっただが・・・見事なツンデレだった。

ラカン「気安く話しかけるな下衆が」で、オレは「私の視界に入るな目障りだひよこ頭が」って言われた。

ナギの時だけほっつっつっつんの少しだけ雰囲気やわらかかった。

やはりアリカ姫は調停役になろうとしたが力及ばず、オレ達に助けを求めに来たらしい。

なのでオレ達は『コヌモエンテレケイア完全なる世界』について独自に内偵を開始した。

オレは原作のおかげで何となく知ってたけど確信はなかったから何も言わなかった。実際原作ではラカンが軽々しく説明をすっ飛ばしてたから知らないんだよね。

ナギとラカンは肉体労働専門過ぎるから適当に遊ばせといた。

詠春、アル、ゼクト、タカミチが調査にでた。

ガトウとオレは集められた情報の整理をすることが多かった。オレは調査の方もやったのだが女装をさせられた。女装といってもホルホルの実際の『エンポリオ・女ホルモン』で女になったただだが・・・容姿はオレを見た詠春とタカミチが真っ赤になったとだけいっておこう。

ナギはアリカ姫と一緒にいることが多かった。叩かれたり、荷物持

ちしたり、叩かれたり、荷物持ちしたり、荷物持ちしたり、パシリか？数回公園デートっぽいこともしてた。このリア充め！

オレとガトウは部屋の一室で、集めてきたファイルの整理・確認をしている。

「おいガトウこれ見てみる。」

そんな中でオレは重要な情報を見つけた。

「な！まさか・・・こんな・・・」

ガチャ

「よおどうしたレオン、ガトウ。そんな深刻な顔してよお」

オレらが唸っているとラカンがプールから帰ってきた。

「ああラカン、実は遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが・・・」

「ちょっと・・・いや、かなり信じたくない情報だね。」

「ヤバいのか？」

「これがどうにも信じがたい内容だな。情報のソースは確かなんだが……」

「ただこのファイル通りだと奴らの行動も納得できる部分があるんだよ。正直信じたくないがな……」

「もっとはつきり言えやお前ら」

「言ってもお前は興味無い話だよ。」

多分「めんどくせえ」とか「あほらしい」とか言う気がする。

「まあこれについてはみんなを集めてから会議かな」

「今はこっちのほう的重要だ。この大物も奴らと繋がりがああるかもしれない」

「なっ！こいつは今の執政官^{コンスル}じゃねーか！メガロメセンブリアのナンバー2まで奴らの手先なのか！？」

さすがにこれは驚くか

国のナンバー2がテロ組織と関わりがあったら……
つうか今の執政官知ってたんだなラカン。

「確証はまだ無いから外で喋るなよ」

ズズンッ！！！！

「なんだ？」

「あつちは今日ナギとアリカ姫が出かけてる方だ！」

レオン side end

ナギ side

「姫さん無事か」

「うむ」

姫さんと買い物してたらいきなり攻撃魔法が襲ってきた。もちろん
姫さんには傷1つ付いていない。オレが守ったからな。

「くそっこんなでさえ魔法街中で使いやがって 死人出てねえだろ
うな」

「やはり今は・・・」

「十中八九奴らの手下だな。俺とあなたのどちらが狙いかわかんね
えがな」

この威力だとあわよくば両方ともってとこか・・・

「ようやく尻尾出しやがった、追跡魔法かけてやったぜ逃がさねえ。姫さんは皆の所戻ってる。俺は奴らを追って本拠地ぶっ壊し・・・」

ガシッ ゲイツ

「ぐえっ」

俺が飛び出そうとしたら襟首を引っ張られた。
首が・・・

「・・・私も行こう」

「ああ？」

危ねえのに何言ってるやがる

「私をここに一人にしておくほうが危険だとわからぬのか愚か者が、それに私の魔法は役に立つぞ？忘れたか鳥頭」

くっくっく

「いいぜ姫さん。ついてきな！！」

「・・・で、貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙句その敵本拠地とやらを壊滅させて来たっていうのか！」

「まあ・・・」

今、詠春から説教受けてる。他のやつらはガン無視してる。ここま
で無視されるとムカつくな。

「何のために秘密裏に調査してると思ってるんだ！万が一殿下に怪
我でも負わせたらどうする気だ！！」

「姫さんノリノリだったぜー？楽しかったーっってたし」

「嘘をつけどうせ貴様が・・・」

あゝうるせえ本当だったの。詠春は真面目すぎんだよ。

「詠春さーん」

おっタカミチにお師匠

「あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ・・・確かに
に笑いましたよね？」

「うむ、驚いたのじゃ」

「あっなんかナギさんにお礼を伝えてっつて」

「な？そうだろ？」

「……………」

詠春はタカミチとお師匠の言葉を受けて悔しそうにしている。オレの言った通りじゃねえか。アルとレオンとラカンはクスクス笑ってやがる。

「それに……ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

どうよこの執政官の会話映像

このあと姫さんは帝国第三皇女と接触しに行った。別れ際に往復ビンタくらった。あのくそ女

くナギ side ends

犯罪者

レオン side

やってきました

「紅き翼、マクギル元老院議員殺人未遂事件（笑）」の現場です。
本物はもう殺されてるから未遂かは微妙だが・・・

「マクギル元老院議員」

「よく来たね。証拠品はオリジナルかね？」

「はい・・・法務官はまだいらっしやいませんか？」
ブラエトル

「法務官は・・・来られぬことになった」

だよね。正確には来たところを殺されたってところかな。

「あれから少し考えたのだがね・・・せつかくの勝ち戦をここにきて
水を差すのもどうかと思ってね」

「ロード・メラメラ」 超小声

「・・・ハア」

議員（偽）の言葉にガトウが困惑している。

「いや・・・その私の意見ではない、そう考える者も多いと言つことだ。時期が悪い、君達も無念だろうが今回は手を引いてだな」

『螢火・火達磨』

ポウンッ!!

「「な・・・」」

「レオンよくやった、おら！」

ボンッ

「ちょーっ！？レオン、ナギおまえらなにやってんだよ！」

「議員のこと燃やしてどうすんだ」

「あほかガトウ。よく見てみ。」

「レオンの言う通りだぜオッサン」

炎の中から現れるは、キザやろう。

「・・・よくわかったな森羅万象、千の呪文の男。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ」

「残念だったな、議員の一人称は「わし」だ。」

まあてきとうだけだな。

「本物のマクギル元老院議員はメガロ湾の底だよ」

「てめえ」

ダンッ

「させませんよ」

ズバシヤン

ナギが突っ込んでったけど炎を操る奴と水を操る奴に阻まれて戻ってきた。

「強いぞ奴ら！」

「はっ！けど生身だ。政治家とかより万倍！！やりやすいぜ！！」

ラカンが剣を担ぎながら言うが・・・室内でそんなでけえ剣だすなよ。

「フッ」

あゝヤバい。連絡される。

「わっわしだ！マクギルだ。反逆者だ。救援を頼む！うむ、暗殺されかけた。うおっ！スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーク、オルレアン奴らは帝国のスパイだった。奴らの仲間もだ。」

オレもこれで犯罪者

「げっ」

「やられたな」

「とにかくこいつら倒すぞ！」

「……………原作どつり逃げられました。」

仕方なく海へ飛び込んだんだがオレはカナツチなので…………

「げほっげほ！助かったよガトウ。」

沈んでた所をオレが沈んでるのに気がついたガトウに助けてもらった。

「気にするな、それにしてもタカミチ君達無事かな」

「ははは、レオンがカナツチとはな。にしてもさっきまで英雄で今や犯罪者か、いいね〜人生波瀾万丈こうでなくっちゃ」

「姫さんがやべえな…………」

自分のことより女（アリカ姫）のことが心配とは、いやはやなんと
も。

あゝそれにしても顔以外水に浸かってるから力が全然はいらね〜

今まで味方だったやつら相手に暴れる訳にもいかないから大変だった。畏に嵌められて連合からも帝国からも追われる身になった紅き翼は辺境を転戦。

アリカ姫を救出するため古代遺跡が立ち並ぶ「夜の迷宮」へ向かった。
ノクティス・ラビリントウス

.....

ドンッ！

ズズウン！！

ポボンッ！

ガラガラ・・

「「よお 来たぜ姫さん」」

「遅いぞ我が騎・・・士？」

.....

夜の迷宮でアリカ姫と見つけたときにマネマネの実でナギになって台詞をかぶせて見たんだけど、オレ（顔ナギ）とナギを見た途端首を傾げてちよつと困惑した表情をした。普段とのギャップが激しすぎて破壊力抜群だった。

でもすぐに無表情に戻るとオレだけを王家の魔力入りビンタで吹っ飛ばされた。よくナギがくらつてるのを見てたがメツチャ痛かった。なんつうか後に響く一撃だった。

で、今はタルシス大陸極西部のオリンポス山にある「紅き翼」の隠れ家に来ている。もちろんヘラス帝国第三皇女のテオドラもいます。

「これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば掘っ建て小屋ではないか！」

第三皇女が隠れ家を見て言った。

オレからしてみれば充分豪邸だけどな．．ちよつと汚いけど．．

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリが」

「むっ無礼者、わらわをだれじゃと思っておる」

「ヘラスの皇族には貸しはあっても借りは無いんでね」

ラカン．．ベロベロバーって．．

「なんじゃと貴様何者じゃ」

「俺様は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカンだ」

「なつ貴様が千の刃だと・・・こんな馬鹿が・・・」

「んだとこの「ラカンそこらへんにしとけ」・・・レオン」

「なにガキで遊んでんだよ。」

「む！わらわはガキではない！おぬし挨拶もせんのか」

はあめんでー

「私の名は、レオン・D・オルレアン。以後よろしくお願いします
ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下。」

「おぬしが『森羅万象』か!？」

「まあそうも言われてる。」

「嘘じゃ!!!こんなひよろい男が戦艦を何個も沈められるわけがない」

カッチーン!

「なあラカン、このガキ燃やして良い?」

ひよろいって言われた、ひよろいって言われた、ひよろいって言われた、この世界来てからずっと鍛えてたのに…

「うおおおお〜い　ちょい待てレオン！落ち着け！相手は皇女だぞ。」

手から火柱を立ててるオレをラカンが抑える。

「ふははは、大丈夫だラカン証拠は残さねえ。灰すら残さん。」

「そついう問題じゃね〜」

ラカンがこつも必死になるのは珍しい気がする。

「や・・やれるものならやってみるがよい」

強がってるのも今のうちだぞ。このやろつ。

「やってやろつじゃねえか、行くぞ、コラッ！」

ラカンの拘束を抜け出してテオドラを追いかける。

「ぎゃー、やっやめるのじゃ〜妾が悪かった〜」

逃げるテオドラを追いかけるオレ（もち、遊び）。ラカンもオレの様子から遊びとわかって傍観中。

おっ、ナギ達が話しはじめたからそろそろ終わるか。

レオン　side　end〜

くナギ side

「あのやけに元気な少女が・・・」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下ですね。アリカ姫と交渉のため出向いたところを一緒に捕えられたようです」

レオン遊んでるな〜皇女も楽しそうだし

「さーて、姫さん助けてやったはいいけどこっから大変だぜ。連合にも帝国にも・・・あんたの国・オステイアにも味方はいねえ」

俺らは今や犯罪者扱いだしな。

「恐れながら事実です。殿下のオステイアも似たような状態で、最新の調査ではオステイア上層部が最も黒いという可能性もあがっております」

ガトウ・・・いつ調べてんだ？犯罪者にされてから調べてるヒマなんか無かったと思うんだけど。

「そうか・・・ 我が騎士よ」

「だから姫さんその『我が騎士』ってなんだよ 俺はクラスで言ったら魔法使いだぜ!？」

ハズカシイだろ、騎士ってガラじゃねえし

「もう連合の兵でないのじゃろ　ならば主はもはや私のものじゃ」

「な・・・」

理論おかしくね？姫さん何処のガキ大将だよ。

「連合に帝国・・・そして我がオステイア。世界全てが我等の敵という訳じゃな。じゃが・・・主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

「当たり前だろアリカ姫。オレらを誰だと思つてんだよ。」

いつの間にか後ろにレオンがいた。第三皇女を肩車して・・・

「ふふ、世界全てが敵。良いではないか。こちらの兵はたったの8人、だが最強の8人じゃ」

「今世界は「完全なる世界」に操られておる。ならば我らが世界を救おう！　我が騎士ナギよ、我が盾となり我が剣となれ」

「・・・へ」

世界を救う・・・か

「やれやれ相変わらずおつかねえ姫さんだぜ」

まあそれでこそ姫さんだが・・・

「いいぜ　俺の杖と翼あんたに預けよう」

これから忙しくなりそうだぜ。

↳
J

s
i
d
e
e
n
d
↳

犯罪者（後書き）

ホントは「我が盾となり」「我が剣となれ」の前にそれぞれ「波の如く」と「雷の如く」をいれたかったけど大事な場面なので断念

贈り物

くテオドラ sideく

わらわは、ヘラス帝国第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ。先日、夜の迷宮にアリカ姫と共に捕えられていたところを紅き翼の面々に助けてもらったのじゃ。

紅き翼といえ、わらわ達帝国からすれば怨敵、奴らに沈められた戦艦の数は百を優に超える。沈めたのは主に『千の刃』と『森羅万象』らしいのじゃ。

先程まで今後の予定を立てるため皆で会議をしておったのじゃが、『コスモエンテレーイア』完全なる世界』という奴らが世界を滅ぼそうとしているらしい。連合、妾の帝国、そしてアリカ姫のオステイア、全てに敵が入り込んでおるらしく、まずは仲間を増やすことになったのじゃ。

妾、アリカ姫、そしてアルビレオ・イマの三人が敵味方の判別を、そして他の面子が戦闘要員として敵と判明したところを攻撃することに決まったのじゃ。

ただわらわ達だけだと襲われたときに戦えるのがアルビレオ・イマだけになってしまうので護衛として『森羅万象』ことレオン・D・オルレアンがついてきた。

「レオンのうレオン」

「なんだよジャリ」

「ジャリではない！わらわにはテオドラという名前があるのじゃ。」
抗議の意味をこめてレオンの頭を叩く。ちなみに今はレオンに肩車されておる。

「何でしょうかテオドラ殿下。」

むっ

「殿下をつけるでない敬語も使わんでよい」

「じゃあなんだテオドラ」

「おぬしは紅き翼の中でも主力じゃろ？労働担当にならなくてよかったのか？」

「別にナギとラカンがいるから問題ねえだろ。こっちはアルしかまともに戦えねえからな。アリカ姫怪我させてナギに怒られるの勘弁だし。」

「わらわは怪我しても良いと言うのか？」

「あんたも怪我されるのはまずい。皇族つてのもあるが将来美人になるだろう女に傷をつける訳にはいかないしね」

び、美人だと・・・妾がか？うっ顔が赤くなってしまったではないか。

「でっでは妾が危ない目にあつたときは助けてくれるのか？」

「オレと一緒にいる間は危険な目にはあわせないから安心していいぞ。」

わらわは嬉しくてレオンの髪に顔を埋めてしまったのじゃ。

レオドラ side end

レオン side

あれからテオドラの子守をしています。しょっちゅう肩車してまわしなないとぐずるんだよ。人前ではしっかり皇女演じてるのに身内（紅き翼＋アリカ姫）だけになると途端に歳相応の態度になる。そのあたりは可愛いところあると思う。あつオレはロリコンじゃないぞ、二十年後のテオドラが好きな（Like）だけだ。決してロリコンではない。大事なので二度言いました。

カキカキ

ゴシゴシ

カキカキ

ゴシゴシ

「うん……」

「どうしたのじゃ？レオン」

「あ？テオドラか……いやちょっとな……」

「なにをさっきから書いては消してを繰り返しておるのじゃ？」

「実は、みんなにプレゼントをあげようと思うんだけどデザインが決まらなくてな。」

デザインを書いた紙は10枚近くある。どれもいまいのだが

「デザイン？ーから作るのか？」

「この間アルから色んな術式教えてもらったから付加させてみよう
と思っつてな。」

「何を作る気なのじゃ？」

「候補は指輪かネックレス、もしくは腕輪が妥当かなと。」

どこのマフィアの守護者達のやつっぽくできたらいいな〜とか思
ってます。あれってカツコイイと思うのオレだけ？

「わらわはネックレスが良いと思うのじゃ」

「ネックレスか・・・そうするか」

指輪だとガトウがポケットにひっかけそうだしな 居合拳の時とか・

腕輪はオレがすでにしてるから却下

デザインはテオドラと一緒に考えるとして・・・

象徴は

大空：ナギ

嵐：ラカン

雨：詠春

晴れ：ガトウ

雷：タカミチ

霧：アル

雲：ゼクト

雪：オレ

月：アリカ姫

風：テオドラ

かな・・・

ナギはリーダーだからね、^{アラルブラ}紅き翼は良くも悪くもすべてナギ次第。

《すべてに染まりつつ、すべてを飲み込み包容する大空》

ラカンは暴れると中々治まらず破壊し尽くす。《荒々しく吹きあれる疾風》

詠春は純粋な剣技なら紅き翼一。《すべてを洗い流す恵みの村雨》

ガトウは咸卦法を使った拳で敵を倒し、交渉によって大空^{ナギ}を照らす

(動きやすいようにする)。《明るく大空を照らす日輪》

タカミチはまだ戦えないけど他のメンバーから様々なこと(咸卦法など)を教わり、将来は紅き翼の後継者となる。《激しい一撃を秘めた雷電》

アルは掴みづらい?性格で、アーティファクト(イノチノシヘン)で姿を変えたりする。《実体のつかめぬ幻影》

ゼクトは長い間生きてきて、たまたまナギのことを気に入ったから仲間になった。それ以外は一人きり。《なにものにも囚われず我が道をいく浮雲》

アリカ姫は王族として人を見守り、他の人(連合や帝国)によって欠けたり満ちたりする。《皆を見守りつつ闇夜に輝く満月》

テオドラは持ち前の雰囲気により皆の間を繋げる。《いつまでも吹き優しい気持ちにさせるそよ風》

オレは、雨が混ざりみぞれ(剣士)になったり、疾風により吹雪(王の財宝や悪魔の実での猛攻)になる、雲(ゼクト)がなかったら雪は降らない(魔法が使えていない)。雪は綺麗だが核にあるのは埃や(奪った)塵(命)オレはそれを背負う。《深々と降り続き積りゆく大雪》

術式はアリカ姫とテオドラは対魔対物障壁で紅き翼は身体強化が妥当だな。

後は某虹の赤ちゃん達のおしゃぶりみたいになると光るようになっているかな。

ナギはオレンジ、ラカンはレッド、詠春はブルー、ガトウはイエロ
ー、タカミチはグリーン、アルはインディゴ、ゼクトはバイオレッ
ト、アリカ姫はホワイト、テオドラはライムグリーン、オレはシル
バー。

「テオドラはデザイン出来たか？」

テオドラは近くの机で真剣に図を書いている。

「うむ、丁度できたぞ」

「どれどれ・・・」

えくと・・・真ん中にそれぞれの色の宝石で左右から紅い翼で軽く宝
石を包んである・・・上出来じゃね？似たような見たことある気が
するけど・・・オレのよりは良い。

「なかなか良いデザインだぞテオドラ。」

テオドラの頭をくしゃくしゃってしてやった。

「むう髪がボサボサになってしまっからやめるのじゃ」

テオドラよ、そんな嬉しそうな顔で言っても意味ないぞ。

「よし作りはじめますか。」

・・・あっ、シルバーの宝石ってなくね？あつたっけ？

只今隠れ家の一つで会議中です。ちゃんと全員集まっています。

「アリカ姫とテオドラの説得でアリアドネーは味方になってくれることになった。」

基本的に会議は、ガトウとアリカ姫が中心になってオレとテオドラによる説明、アルと詠春による作戦説明（肉体労働側の）である。ナギとラカンはそれなりに聞いている。

「あそこの騎士団はなかなか強いから味方になってくれるのはありがたい」

アリアドネーは世界最大の独立学術都市国家で、どんな権力にも屈せず、例えば犯罪者であろうとも学ぼうとする意志と意欲があれば入学出来る所だ。

「でも帝国と連合の方は厳しいんだよね？だろ？ガトウ、テオドラ殿下」

ナギの言う通りなんだよね

「昔からの知り合いのとそのツテをたどってるんだが・・・なかなか」

「妾もお父様は信じてくれたのじゃが議会や官僚が信じてくれんのじゃ。人によってはわらわ達を捕えようとしてくるのじゃ。もつともレオンが軽くあしらってくれるがの」

なかには一個大隊連れてきたやつもいた。覇気で気絶させてさっさと帰ってきたけど・・・

「アル、奴ら（完全なる世界）の情報手に入ったか？」

「手に入ったとしても下部組織の情報ばかりで・・・とてもじゃないですけど決定的なのはありません ナギ達にはこのあと何個か潰していただきますが」

まだ2ヶ月しかたつてないからな、原作でラカンが6ヶ月の死闘つってたし。

「では頭脳労働担当はこれまでどつりに情報収集、肉体労働担当は敵とわかつたこの紙に書いてある組織とそのアジトの破壊を」

ガタツ

「あゝちよつと出ていくの待ってくんね？」

アリカ姫が会議を締め括って皆が出ていこうとするのを止める。

「なんじゃレオン」

先生^{ゼクト}が代表してオレに聞く。

「実は皆に渡すものがあつて・・・」

ゲイト・オブ・バビロン
王の財宝から10個のネックレスを取り出してテーブルに置く。

「妾とレオンで作ったのじゃ」

「わー良くできてますね」

タカミチはテーブルにおいたネックレスを見ている。

「おや？宝石がすべて違いますね」

「ナギがオレンジ、ラカンがレッド、詠春がブルー、ガトウがイエロー、タカミチがグリーン、アルがインディゴ、先生がバイオレット、アリカ姫がホワイト、テオドラがライムグリーン、オレがシルバーのやつだ。」

「色の意味は有るのか？」

「色っていうより象徴って感じ？」

「象徴？」

詠春悩んでるね〜

「なんとなくだけどもみんなを天候とかに例えたんだよ。それぞれ魔力か気を宝石にこめてみ。」

オレがそう言うとみんな自分のやつにこめた。

ぶうん

「「「「「おお」「」「」「」

宝石から光がのびてそれぞれの《》内の文字と天候のマークが浮かび上がった。苦労したんだよね。

「どうよ結構自信作。」

みんながそれぞれ首にかけていくのを見つつアリカ姫に声をかける。

「アリカ姫。それナギにかけて貰えば？」

「なっ！なにを言っておる」

自分で気づいてないのか？ナギを気にかけてること。

「こういうのはやっぱり騎士につけてもらわないとね。ナギちょっと来い！アリカ姫が呼んでるぞ。」

アリカ姫の了解を得ずナギを呼ぶ。

「んあ？なんだよ？」

「ほらアリカ姫。」

グイッ

ちよつと背中を押すオレ

「我が騎士よ、妾にこれをつけてはくれぬか？」

他のみんなは少し離れて様子を見ている。アルは小声でクスクス言ってる。ラカン はめっちゃニヤニヤしてる。

「なんで俺がわざわざやらなきゃいけないんだよ」

ナギのバカヤロー！わざわざイベント作ってやったのにこのガキが、仕方ない・・・

「こういう時は男性がつけてやるもんなんだよ。」

「レオン、お前がいるじゃねえか」

「アリカ姫は騎士であるお前がいいんだとさ。」

「へいへい・・・ほら姫さんつけてやるよ」

まあ無事に終わりました。

「レオンおぬしは少々残れ」

あれ？なんで？アリカ姫怖いよ。笑ってるけど目が氷河期だよ！？初めて見る笑顔がこれかよ。

「な、なんででしょうか・・・」

カツカツ

ちよっ無言で近づいて来ないで！逃げないと・・・逃げられない！？身体が動かない！これがギャグ補正か？補正なのか！？

バチンっ

「ぐはっ・・・」

王家の魔力入りビンタ・打ち下ろしver・・・おそるべ・・・し・

意識を取り戻したのは一日後だった。

レオン side end

贈り物（後書き）

天候の説明のときは突っ込まないでくれるとうれしいです。

最終決戦

なんやかんやありまして紅き翼は大活躍！映画なら3部作単行本なら14巻分くらいはいくであるう6ヶ月の死闘の後、遂に完全なる世界の本拠地を突き止め追い詰めた！場所は世界最古の都・王都才スティア・空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」！

レオン side

やっと来ましたラストダンジョン！いやあ長かった・

「不気味なくらい静かだな・・・」

「舐めてんだろ悪の組織なんてそんなもんだ」

「降伏の白旗作るのに忙しいんじゃないかね？」

「はっ違いねえ」

オレの冗談にナギは笑いながらそういつてきた。

「あのつナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

きました後のアリアドネー総長セラスさん。実は前にも会ったことがあります。アリアドネーに協力要請しにいったときに現総長の部屋

にいました。総長の補佐らしい。

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる、頼んだぜ」

「ハッ、それであのナギ殿レオン殿」

「ん？」

「あ？」

オレもか

「サツサインを頂けないでしょうか」

職権乱用だよな

「いいぜそんなくらい。ほいっと、レオン次」

「へーい」

「そ尊敬してました」

キュキュキュッと

「はーいござ。」

「ありがとうございます」

ちよつとするとガトウから連絡が来た。
オレもそろそろ最初の攻撃のために準備しますか・

「ロード・ニキュニキュ」

ボンッ ボンッ

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう」

全く元老院の頭の堅いじじい共めというかやつらも黒幕の一部か。
帝国は皇帝は了承してんのに官僚のバカ共のせいだな。

ちなみにタカミチだけだと護衛等の観点からまだ不安があるので各種ダイアルと転移魔法符×2を渡してある。

「決戦を遅らせることは出来ないか？」

「無理ですね私達でやるしかないですね」

「既にタイムリミットだ」

アルと詠春の言う通りだね姫子ちゃんがいつの間にか囚われてたし時間がもうねえ。

「彼らはもう“世界を無に帰す儀式”を始めています 世界の鍵“黄昏の姫御子”は彼らの手にあるのですから」

ギユッギユッ

「ところでレオンはさっきからなにやっておるのじゃ?」

「中に入るために外の雑魚を倒す必要があるでしょ?そのための爆弾作ってる。」

「爆弾ですか?」

「そつ 衝撃にそなえとけよ」

パツ・・・

『ウルススショック
熊の衝撃』

ドオ・・・ン!!

大気を圧縮して作った塊を敵召喚魔軍団の中に放り投げて吹っ飛ばす。

「ロード・メラメラ」

『大炎戒』

ポポオツツツ!!

『炎帝』

ボグワアアアアン!!!!!!

さらに敵を減らすために小さな太陽をぶつ放す。

これで死ぬ人も減るだろ。

「よしだいぶ減ったな。ナギ！行こうぜ！」

「ああ！よおし野郎ども行くぜっ！！！」

ザッ！

オレが減らして敵が少なくなったところを一気に突破して侵入すると入口のホールっぽいところで敵幹部も出てきた。

「やあ、千の呪文の男、森羅万象また会ったね。これで何度目だい？僕達もこの半年で随分と数を減らされてしまったよ」

ボンッ！

「いきなり酷いな森羅万象」

「はっ！世界を滅ぼそうとするやつに遠慮はいらねえ。例えお前らにとって偽りだとしても今この世界にいる人にとっては本物だ！滅ぼさせなんかさせねえ！！」

「君は色々知っているようだね。まあいい、この辺りで決着をつけよう」

「ナギ！」

「おう行くぞ！！！」

ナギがフェイト、詠春が雷をつかう奴、ラカンが炎をつかう奴、ゼクトが水をつかう奴、アルとオレが召喚士デユナミスと戦うことになった。なんかデユナミスの奴は原作でいろいろやってたから倒さないと後々めんどそうだからです。

「アル死なないとは思っけど死ぬなよ。」

戦闘に入る寸前に軽口を叩いてみた。

「私は貴方達と違ってバグキャラでないので了解しかねますね、来ます！」

敵の召喚魔と影魔法がオレとアルにせまる。

『ゲイト・オブ・バヒロン
王の財宝』

ガンッ！ドドドドドッ！

召喚魔を数多の神剣魔剣の雨で串刺しにする。

ベコンッ！グシャッ！

オレが敵の動きを封じたところにアルの重力魔法が炸裂する。普通ならこれで十分なのだが敵は普通ではない。

「チイツやっぱ本体攻撃しないと意味ないか・・・」

「まあ召喚魔の一種のようですね」

ビュンツッ！

ブンツッ！

一本一本が大木のような太さの触手がオレとアルを狙って上下左右から迫ってくる。
ちつ埒があかねえ。

「アル！オレが攻撃しまくって敵と召喚魔の行動不能にするから重力魔法でブラックホールでも作って押し潰せ！」

「わかりました」

「ロード・コロコロ」

『雷鳥ヒノ』

『雷獣キテン』

『雷龍シャムプウル』

バリッ！

バリリリリツツッ！！！！

雷で作った鳥と狼と龍で敵の召喚魔を薙ぎ払う。

『エル・トール神の裁き』

ズドオオオオオン！！

そこへすかさず2億Vの雷を落とす。

障壁で防がれてるだろうが一瞬でも隙ができれば十分だ。

「ロード・グラグラ」

「はああああああつ！！」

『拳震』

電撃で一瞬スタンしたところに地震を付加した拳をデユナミスに叩きつける。

「ぐっ・・・」

地震の力と武装色の覇気をまとった一撃はデユナミスの障壁を破壊して腹に穴をあけた。

「ロード・カゲカゲ」

『ブリックバット欠片蝙蝠』

『ブリックボックス影箱』

暇を開けず影による拘束で動きを封じた。

「アル！今だ！」

「ええ！」

ギユワツツ！！！！

アルの魔法が終わるとそこにはなににも無かった。これで大丈夫なはず。

「ふう終わったな。逃げられてはいないよな？」

「おそらく大丈夫なはずです」

もしこれで生きてたらやつもバグキャラだな。

「みんなはどうだ？」

「皆多少の怪我はしてますが勝ったみたいですね」

皆と合流し外に行くとナギがフェイトの首を持って持ち上げてた。つてこのあとやべえ！

「ナギっ！危ねえ！」

バスッ

オレが注意した直後ナギを何かが貫いた。

「ナギィ！」

「はっ！いかんレオン合わせるのじゃ」

「はいっ クラテイスター・アイギス
最強防護」

ウォンツ ボボツ

でもこれだけじゃダメだ

「ロード・トリトリ：モデル・不死鳥」
フェニックス

ドツツ・・・パキャン！

アイギスは一瞬耐えたが砕け散った。

オレはナギ達の前で攻撃を受け止めたがすぐさま二撃目がきて下半身と両腕を吹き飛ばされた。

オレがだいぶ威力を減らしたがそれでも凄まじかったらしくラカンは両腕吹っ飛んでるし、詠春もナギを庇って重傷、アルとゼクトも大なり小なりの怪我を負っていた。

「までコラてめえ！！」

「任せなジャツク」

ザンツ

「いけませんナギ！その身体では・・・」

「アルはさっさとレオンの治療しろ」

「問題無い。」

「レオン!？」

「大丈夫だ…すぐに元に戻る。アルは残りの全魔力でナギの治療する。くはっ・・・」

本当ならダメージは無いはずなのに血が出てます。再生限界か? 治りも遅い・・・造物主ライフメーカーのやつ覇気でも使ったのか?

「しかし・・・」

「早くしろ!今まと・・・もに動けるのは・・・ナギだけだろ。」

「30分もてば充分だぜ」

「ワシもいくぞナギ。バカ弟子2号が身体を張ってくれたからのワシが1番傷も浅い」

「ゼクト! たった二人では無理です!」

「ここで奴を止めなければ世界が無に帰すのじゃ、無理にでもいっしかなかるっ」

「ナギ待て! 奴は別物だ死ぬぞ! 態勢を立て直して・・・」

「らしくねえなジャック。んなことしてたら間にあわねえよ。それに俺は無敵の千の呪文の男だぜ? 俺は勝つ! 任せとけ!!! お師匠行きましょっ!」

「うむ！」

ドンッ

ナギと先生が飛んで行った。予定ではオレも一緒に行くはずだったが今の状態では無理だった。

ヤバい貧血と魔力枯渇で意識が・・・

「アル、後任せた・・・」

オレはそこで意識を失った。

レオン side end

最終決戦（後書き）

レオンの魔力はアイギスと身体を盾にしたときの肉体強化にほとんど回したため枯渇しました。

誤字や脱字がある場合は教えていただけると幸いです。

これからもよろしくお願いします。

和平なる

レオン side

「・・・ん・・・知らない天井・・・では無いな。」

え〜とライフメーカーの攻撃受けたんだよな、たしか・・・

腕：OK

下半身：OK

魔力：20%ぐらい

死んでなくてよかった、不老だけど不死ではないからな。

「起きましたか」

扉からアルが入ってきた。

「アルか・・・」

「調子はどうですか？」

「ぼちぼちでんなあ」

「なんで関西弁なんですか？」

アル関西弁知ってるんだ・・・

「冗談は置いていて、身体は大丈夫だな。ちゃんと元に復活してる

し……。そうだ、ライフメーカーどうした？」

まあ今生きてるんだからちゃんと倒したんだらうけど

「ナギが勝ちましたよ」

「先生は？」

「……ゼクトは……」

やっぱりダメだったか……魔法教えてくれたお礼言いたかったな……あれ？そういえばライフメーカーに乗っ取られたんだっけか？

「死んだか……」

「ええ」

「そうか。オレはどれくらい寝てた？」

「約一日ですね。おそらくそろそろナギが「レオン！起きたか！」来ましたね、では私は失礼します」

???

アルがいなくなった後すぐにナギが部屋に入ってきた。

「魔力以外はばっちりかな。」

「そうか、そっぴやアルどこいった？」

「転移で消えたぞ。」

「逃げやがったな。まあいいや！レオンさっさと正装に着替える今から式典だ！」

アル注目浴びるの嫌で逃げたのか…

「オレ出なくていい？」

「第三皇女からの伝言で・レオンお主に来ないという選択肢は無いぞ・だってさ」

「はぁ・・・」

ナギがアリカ姫にビンタされたが無事に式典は終わりました。

今は酒場で打ち上げみたいなのをしている。アルに聞きたいことがあるから聞いてみるかな・・・。

レオン side end

（アルビレオ side）

先日の終戦を祝つての式典が終わり皆で飲んでいきます。

ラカン・タカミチ君に酒を飲ませようとするのはどうかと思ひますよ。後十年ほど待ちなさい。

レオンは少し離れたところで飲んでますね。それにしても昨日下半身が吹っ飛んでた人には見えませんね。青い炎を纏つて復活するのは驚きました。ほかにも聞きたいことがありますし、後で聞いてみますか・・

ギイツ

ワアアアアアアアアアア!

「うお」

「真打ち登場!」

「来たかナギ!」

やっときましたか・大方アリカ姫、いや陛下と話でもしてきたのですかね。

「てめえ胸の傷はもういいのかよ!？」

ドスドス

「てめえこそ両腕無いくせに」

ガガガッ

ナギ、ラカン・・・あなた達は私の治療を無かったことにする気で
すか？傷をド突きあうなんて・・・まあバグキャラですから平気だと
思います。

「貴様ら傷をド突きあうなッ！！」

詠春大変ですね・・・

「詠春てめーも一番怪我ひでえのによく式典なんか出るぜ」

ドムドム

「だから傷をド突くな！！死ぬは！！」

ラカンそろそろやめてあげて下さい。詠春脂汗かいてますから。あ
なたと違ってバグキャラでは無いのですから・・・

「アルてめえはなんで式典に出ねえんだよ！！」

「私上がり症なもので・・・」

もちろん嘘ですが・・・

「嘘つくんじゃねえ」

「フフフ」

「それにしてもまさか、あのゼクト殿が逝ってしまわれるとは……」

ピクッ！

レオン・・・反応しましたね

「なー？あの妖怪じじい殺しても死なねえ気がしたんだが」

「いやっお師匠は……」

「ナギ」

私はナギの言葉を遮りました。今話すことじゃないですね。

「・・・死んだ奴らと世界の平和に」

「アルさん」

ちよっとずつ飲んでいると声をかけられました。

「どうしましたタカミチ君」

「諸悪の根源を倒した翌日に停戦合意、即記念式典なんて随分と手際がいいですよね？」

「まあ両大国の本格的な講和の実現はまだ先になりますから。まずは『和平なる』をアピールするのが狙いでしょう」

もつとも他にも理由はあるのですが・・・

「でもアルさん、こんな王都から遠い離宮で式典なんておかしいと思いませんか？」

聡明ですね。そこにいる魔力バカナギと筋肉バカラカンとは大違いです。

「おいアルちよつといいか？」

「何ですか？レオン」

「込み入った話がある。」

珍しいですね。顔も真剣ですし・・・

「タカミチ君、私はレオンと話があるので失礼しますね」

「あ、はい」

「アルビレオ side end」

「レオン side」

アルの転移で紅き翼の秘密基地に来た。秘密基地、世界中にあるんだよな・・・

「さて話は何ですか、レオン」

「とりあえず聞きたいのはオスティアのことだな・・・」

「・・・気付いていましたか」

「落ちるんだよな。」

原作で知ってるけど確認はしないとね

「ええ落ちるでしょうね」

「あとどれくらいだ？」

「あと数時間で本格的に落ちはじめますね」

それならなんとか間に合うか・

「ありがとうございます。」

オレは出口に向かっていく。

「待ってください！何をやる気ですか？」

「ちょっとした人助けだよ。アル、ナギのことよろしくね。騒ぐと
思うから。」

ギイツ

「戻って来るんでしょうね」

「もちろん死ぬつもりはないよ。」

バタンッ

さて急ぐかな・・・

レオン side end

オスティア崩落、アリカ救出

（アリカ side）

戦争は、ナギ達『紅き翼』が元凶を倒し終了した。儀式が発動し世界が崩壊しそうになったのは連合・帝国両軍協力の反転術式で防ぐことが出来た。

しかし、その代償として・・・我が国、オスティアは滅ぶ・・・

「陛下!!!」

「!」

クルトとガトウか

「時間です、まもなく第一段階が」

「進捗状況は？」

「アスナ姫封印直後から全艦艇全力であたっており現在37%」

「陛下のお考えどおり式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱も今のところありませんが.....
- 崩落が始まればその限りでは 全市民の救出は困難を極めるかと.....!!!」

ギリッ!!!

「わかった妾も直接指揮にあたる。ガトウ、クルトついてまいれ」

「はっ！」

必ず救ってみせる！

「王都周辺に強力な魔力消失現象を確認」

「数値が大幅に増大！浮かんでいるのが困難になります！」

「わかっておる。対抗呪文塗装装甲を施している舟を中心へ向かわせろ、塗装装甲が無い舟は消失現象の始まっていない周辺の地区にまわせ。最大効率で回せ、だが捨てていい命は無い！貴賤を問わずに全員救い出せ！これは厳命じゃ！」

「はっ！」

「っ！！陛下、王都上空の小島と岩が落下し始めました！」

「くっ」

時間が足りんどうすればっ…

「おい、諦めんなよ。」

「!?!」

この声は……

「陛下！王都とそこから東の地域での崩落が止まりました！消失現象は進んでいますが高度を維持しています」

観測士から報告が入った直後に前方のスクリーンに紅き翼が一人「レオン・D・オルレアン」が映った。

「東の方はオレが不時着させるから心配すんな。あんたらは西の方を頼むぜ。」

「どうやっ いや今はよい。助太刀感謝する」

どうやって浮かべているか疑問はあるが今は問い詰める時間ももつたない。

「それじゃあまた後でな。」

ブンッ

それだけ言うと画面が消えた。

「今の聞いておったな東の島々の不時着はレオンに任せよあやつはやると言ったらやる！妾達は西を救助する。それが済み次第東の救助を行う、総員各艦艇に連絡せよ」

「はっ！」

レオンの助けもあり民たちの避難は順調に進んでいる。

「王都ならびに周辺の島の避難完了しました。しかし貧民島スラムの避難作業が難航しています。時間が足りません！」

「理由は!?!」

「町の構造が複雑な上 不法移民の数が多く全住民の把握が困難になっています」

たしかにこのままではいかな...

「……ッここは任せる、貧民島スラムへは妾が直接赴き不時着させる！妾の魔法なら無効化されぬ」

「いけません女王陛下ッ、ここはレオンさんに救援を……」

「クルト、レオンもこの中約半分もの民を救ってくれておる。これ以上はさすがにあやつでも厳しかろう。それに妾の国じゃ妾が動かすぞじする」

レオンには感謝しきれんな。あやつがおらねば壊滅的であったな、すべてが終わったら礼を言わねば。

「しかs「ゴルアアーツこんのバカ姫！」 ナギ？」

ナギか…

「おいアリカてめえ！！どついうこつたこれは！？」

「見てわからぬか世界を救う代償に自らの国を滅ぼした」

あの状況でこれ以外方法がなかったのだが…

「ッなんで話さなかったこの唐変木！！」

「戦うことしか能のない主が何の役に立つ 話しても解決策など出ん」

「ぐつくそつ…今からそつちに向かう待ってる」

「ここに来る暇があるなら東の地区に向かい落下する浮遊岩の破壊を要請する レオンが島々を不時着させておるが避難民の頭上に落下するのまではさすがに手が回らぬだろ」

「レオンが！？」

あやつ仲間にも言っておらなかったのか

「逃亡生活中に使用したボロ舟にも対抗呪文処理を施してある！そ

れw「もう乗ってるよー!」では救出活動に全力で尽くした後そなた達はレオンを拾いそのままここを去れ、最後の命令じゃ二度と戻るな」

「なッ!」

「通信終了」

話すことはない

「陛下しばしお待ちを!アルビレオ・イマ!聞いていますか?クルトです」

「はい、なんですか?」

クルトの進言によりナギ達は救助がすんだら身を隠すことを了承した。正確にはナギ以外はだが。

「そなた達には世話になったな。さらばじゃ」

「陛下も」武運を「

ブツンッ

もう会うことは無いであろうな。

「陛下」

「クルト今は救助が最優先じゃ、急ぐぞ手遅れになる」

「はっはい…」

あやつらは上手くやるじゃろう。妾達もしっかりやらなくては。

「アリカ side end」

「レオン side」

オステイア崩落後、アリカは捕えられた。罪状は前王殺し、完全なる世界との関与の疑い、オステイア崩落を実行、etc…。とまあ有ること無いことわんさかつけてケルベラス無限監獄に幽閉された。

そしてアリカが捕えられて1年がたった。オレ達紅き翼はというと…秘密基地のひとつで会議をしている。会議つつより助けに行かないナギを詠春が問い詰めてるだけだけだな。

「ナギこのままでいいのか！？アリカ様を放っておいて」

「……………」

さっきから言葉は違うが繰り返した。ラカンは我関せずといった感

じでくつろいでる。アルは本を読んでる振りをしながら様子をつかがっている。オレ？オレはもうめんどくなくなったから止める。

「そこらにしとけ詠春。」

「レオン！でも……」

「いいから少し静かにしてくれ。怒鳴ってるだけじゃ話は進まないよ。」

「すまない熱くなりすぎた」

オレの言葉で詠春は頭に上っていた血が降りたらしい。

「ナギ、黙ってたら何も通じないぞ。今何を思ってるかだけでもいいから言え、そうすりゃ解決策も出てくる。」

「……なあレオン、正義ってなんだろうな」

「その問いに正確に答えるのは無理かな。1つ言えるのは正義はたった一つじゃないってことかな。」

「一つじゃない？」

オレの答えにナギが疑問を口にする。

ちなみにラカンとアル、詠春も聞き耳を立てている。

「そつオレ達にはオレ達の、完全なる世界のやつらには完全なる世界のやつらの、連合には連合の、帝国には帝国のそれぞれ違った“正義”がある。大戦もそれぞれの正義が食い違ったから起きたんだ。」

まあ完全なる世界にそそのかされてつてのもあるだろうが……。最終的には完全なる世界の“正義”が、オレ達と連合、帝国の正義の逆、つまりオレ達にとっての“悪”になった。そう考えると単純に“正義”は語れない、“正義”の反対はまた違った“正義”があるだけだ。」

「正義の反対は違った正義……」

「まあその話は少し横に置いて。ナギ！一つ言っておくことがある。」

それまで顔を伏せていたナギが顔を上げる。目に迷いがある、アリのことで悩んでんな……まあ仕方ないと思うが。

「お前はオレ達のリーダーだ。迷うな！お前がフラフラしてやがったらオレ達は誰を信じりゃいいんだよ！お前の“正義”を見せてみる、ナギ！それが納得できる正義ならオレ達はどこまでもついててやる……！」

「フッフ、そうですよナギ。もし悩んだのなら言うてください、道を切り開く術すべを示しましょう」

「立ちはだかる敵がいるなら叩き切ろう」

「やるなら思いつきりだぜナギ」

「レオン、アル、詠春、ラカン……そうだな！うじうじしてるのは性に合わねえ！」

目に力が戻ったなこれなら大丈夫そうだ。

「さてオレはちょっと出かけてくるからあとよろしくな。一週間ぐらいで帰ってくるから。」

「どこに行くので？」

「ちょっとツンデレで頑固な人に会ってこようかと…」

アルは、オレの答えの意味に気付いたようでにこやかに笑いながらかえしてきた。

「お気をつけてくださいね」

「問題無しだぜ。」

オレはそう言って光になって移動した。

さあ、やってきましたケルベラス無限監獄最重要囚人区域！！
どうやって入ったかって？ スケスケの実で透明になって潜入して、
事務室で投獄場所を確認、投獄場所へ、だよ。途中警報が鳴ったけど誤作動と判断されたいらしい。ここでは魔法が使えないようにしてあるらしいが悪魔の実には関係ありません。

「ロード・ドアドア」

ガチャッ

「ハロー元気にしてるか？」

「なっ！」

おお驚いてる驚いてる。

だよな、ここに来れるのは元老院議員か食事を持ってくるやつだけだからね。

「話し相手になりに来たぜ。」

「お主どうやってここへ…。」

「能力使って侵入してきた。」

オレがさも当然といった感じに返すと呆れたように返してきた。

「本当に規格外じゃなこんなところまで侵入するとは…。」

そのあと最近の状況とかを教えた。

「でさああなたはそのまま死ぬつもりなの？」

一通り報告した後には切り出した。

「もちろんじゃ、妾が多くの憎しみを引き受けて処刑されることで世の不幸を少しでも減らすことができるなら本望じゃ。」

やっぱりそうか…

「は〜」

ごっくんっ！

「??？」

オレの拳骨（覇気付き）でアリカは頭から煙を出してる。

「まあお前がどう思ってるかなんて問題じゃないんだわ。紅き翼^{おれたち}は仲間が殺されるのを黙って見ていることなんかできない。別にオレら全員を信じるなんて言わない、けどなせめてナギだけは信じる！オレが言いたいのはこれだけだ。」

「ナギを信じる…」

こっちも大丈夫そうかな。

「じゃあな。」

さて帰ったら救出計画で来てるかな？

アリカの処刑の日がやってきた。周囲は連合の艦隊と精鋭の大隊が

警備に当たってる。

「これより戦犯アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの公開処刑を行うー！！」

今元老院議員の一人が罪状を読み上げている。

オレ達はそれぞれの場所に潜んでる。ナギは溪谷のそばでアリカが飛び込んだら助けに行く。ラカンはメガ口の騎士の中に混ざってる。甲冑で全身隠してるからしゃべんなきゃ見つからない。ガトウと詠春、アルそしてオレは『^{エアドア}空気扉』で作った空間にいる。

「魔獣うごめくケルベラス溪谷、魔法を一切使えぬ谷底は魔法使いにとつては『死の谷』。古き残虐な処刑法ですがこの残虐さをもって魔法世界全土の溜飲を下げることとなりますよ」

ようはこれくらいの処刑でアリカを殺さないと元老院のジジイ共は安心できないんだよな。

ちなみに悪魔の実の能力は使用可能だった。

アリカは抵抗もなく穴に飛び込んだ。

「くっくっ、王家の血肉はさぞ美味でありましょうな。この処刑の良いところは復活がほぼ不可能な点です」

“ほぼ”なら可能性はあるよな、“絶対”じゃないんだから。確実に殺したいなら直接斬首でもすればよかったんだよ。

「よろし」「よーっしこんなモンだろ」なっ！」

ラカン、気が早いな。

「撮れたか？撮ったな？ご苦労さん。お〜いおっさんこれ生中継じゃないよな？」

「ぶ無礼者！何者だ貴様！」

そろそろ行きますか。

ガシィッ

ラカンがしゃべってたじいさんの頭を掴んだ。

「録画はここで終わりだ、で今から起こることは無かったことになる」

「きつ貴様は！」

ガシャンっ！

筋肉のバンプだけで甲冑を内側から壊すってお前…

「せつ千の刃のジャック・ラカン！」

ザシユッ！

「青山…詠春！」

フワリ！

「アルビレオ・イマ！」

ザっ！

「ガトウ…！」

次々と飛び出してきた紅き翼の面々に周りは驚いている。

ズシヤツ！

「レオン・D・オルレアン！」

オレの登場にますます慌しくなる。

「紅き翼…では谷底の王女は…！バカなッいくら千の呪文の男でもあの谷からはとても！」

「それはどうか？」

「魔法が使えないだけであいつが死ぬかよ！」

議員の疑問にオレとラカンが答える。

「ぐっ反逆者だ捕らえよ！谷底の二人も逃がすな！」

議員の命令で兵士が戦闘態勢にはいる。

「やるのか？いいのかその程度の戦力で？」

ラカンが挑発すると議員が反論してきた。

「ふっその程度だと？愚か者が、警備はここに見えるだけではない周囲数十キロに二個艦隊と精鋭三千名が包囲している　いくら貴様

ハレオン ナギが無事救出したのもう少ししたら退却しますよ

ハイテンションで暴れてたらアルから念話が来た。
よく見ると遠くで2人が浮かんでるのが見えた。

ハ了解、後一撃入れたらそっちに向かう。ヾ

「ロード・スナスナ」

ビュルルルル

『サイフルス
砂嵐』

ドウッ!!!!!!!!!!!!!!

残った兵をまとめて吹っ飛ばすため超特大(上空数百m、直径三百mくらい)の砂嵐を起こしてオレは離脱した。

ラカンが巻き込まれたらしいがかすり傷も負ってなかった……バグめ。

ハレオン side end

京都と麻帆良

レオン side

「京都とうちやくく！」

久しぶりの京都だ。前に来たのは中学の修学旅行だった。な転生する前だが・・・

「レオン目立つから静かにしてくれ」

「やだね詠春」

そもそもこの面子で目立たないほうがおかしいぞ？ナギの赤毛、オレとアリカ姫の金髪、。まあ認識障害使ってるから“ちょっと騒いでる外人達”程度にしか見えてないけどな。

ラカンが諸事情により来てない。正確には来れないだが。アルはオレの腰にある。あいつ本だったらしい、原作でも古本とか呼ばれてた気がするけどマジで本だった。

「詠春、有名どころ案内よろしくね。」

「わかってるよ」

「金閣、銀閣、清水寺、龍安寺、二条城いろいろあるよね。」

「随分と知ってるんだな」

前世で行ったからな！

「フッフ、昨日調べてましたからね」

アルが声だけ出してきた。

偽装工作？も完璧だぜ！

「なんかしみつたれたとこだな」

「ナギ！この古さがいいんじゃないか。木の匂いとかリラックス出来るじゃん！」

「ヘイヘイわかったから行こうぜ」

観光中

「それにしてもあの二人はラブラブですな」

ナギとアリカ姫が手を繋ぎながら歩いている。姫子ちゃんはタカミチが世話してる。

「ヤキモチですか？レオン」

「ちげえよどちらかと言えばあの桃色空間が嫌いなだけだ。」

「・・・フッフ」

クイクイ

オレの服の裾が引つ張られた。

「ん？どうした姫子ちゃん？」

「・・・お腹すいた、あとタカミチつまらない」

「ええっ！」

あゝタカミチ凹んじゃったよ。結構頑張ってたのにね・・・

時間は・・・PM5:00か

「詠春、実家までどれくらい？姫子ちゃんお腹すいたってさ。」

「もうすぐだ。でも夕飯はPM6:30からの予定だぞ。」

うゝん、食べ物はすぐに取り出せるけど（王の財宝から）すぐに夕飯か・・・

「姫子ちゃんもうちよつと我慢できるかな？今食べると夕御飯食べられなくなっちゃうから。」

オレは屈んで目線をあわせた。

「・・・わかった」

「よしっお利口さんだな。」

髪の毛をくしゃくしゃやってしてみた。

「ロリロン」

ピキッ

「おいアル潰してやるからそこ動くなよ！」

ドカッ！

ヒラリッ

アル（本ver）を地面に置いて踏みつけようとしたら実体化して避けやがった。

「避けんな！」

「嫌ですよ。私まだ死にたくありませんし」

「タカミチ、詠春、先行っててくれあの変態潰したら追いつく。」

「程々にしろよ」

「わかりました、さ行きましようアスナ姫。」

「で、どうする？」

「俺はやるぜ」

「私は必要なさそうなので見学で。こっちの世界での実体化疲れま
すし」

「封印の準備するよ」

上からナギ、アル、詠春です。

「じゃあまず詠春が腕全部切り落として、その後オレが凍らせるか
ら最後にナギが砕け。そしたら関西呪術協会で封印で。」

「うしっ」

「「わかったよ（ました）」」

『斬魔剣・弐の太刀』

ダンッ

ブンッ

ほぎゅっ！

ズバババッ！

「今度オレの番」

「ロード・ヒエヒエ」

まずは詠春が切り落とした腕に・

『アイスタئمカプセル』

ビュウツ

パキインツ！

残りの胴体は湖の水ごとでいいや

『アイスエイジ
氷河時代』

ガキーン！

片手を湖につけて氷づけにする。

「ナギよろしく」

「危ねえな！一緒に氷漬けにされるとこだったぞ！」

「これくらいでやられるんだったらお前じゃねえよ。」

「はんつ！えーと 契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨人を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻『千の雷』」

」

ドンツツツ！ズグワンツ！ゴロゴロゴロゴロツ！！！！

「フフフ 彼らにかかると大鬼神でも瞬殺ですね」

「というか俺はかわいいそうに感じたよ」

詠春それは失礼だぞ。あとお前もその一員だ。

「まあ大鬼神は出て来る時を間違っただってことで。」

「おーいさっさと封印して帰ろうぜ」

「そうですねお姫様達を怒らせる訳にはいきませんからね」

スクナ封印後少しづつるんだあとオレ達はそれぞれ別行動になった。オレは魔法世界で俗に言う「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」ってやつをやっている、名乗ってはないが。紛争地域とか帝国をまわってる。ゾン系能力のおかげか帝国の民からの受けは良い。たまに街中歩いてると大戦中に殺した人の家族が復讐しにくることはあるが……。あつ、その人達は気絶させただけで殺してないよ。

「なあテオドラ。」

「ん？なんじゃレオン」

オレは向かいでデザートをパクついでる第三皇女に質問した。

「なんでお前に食事を作るために呼び出されなきゃならない。」

「なに久しぶりにお主の食事が食べたくなっただけじゃ」

いや食事気に入ってくれるのは嬉しいんだが「来ないと賞金をかけるぞ」って言うって有無を言わさず呼び出すのはやめてほしい・・・
こっちのも予定があるんだから。

「じゃあオレは帰るぞ。」

「まっ待つのじゃー！」

ドカッ

「ぐへっ・・・テオドラいきなり肩車してきて首しめるのは止めてくれ。そもそも皇女がそんなはしたない事するな。」

「普段はちゃんと皇女を演じておる」

「はいはい」

ぽぷっ

「もうちょっといってくれぬか？最近皆と会えないから寂しいのじゃ・

「

まだ甘えたがる歳だったんだな。あんまり甘えらんなかったんだろ
うな。

「ああ、わかったよ。」

肩車から降りしてギュッとしてやった。

「い、いきなりにするのじゃ」

顔赤くしてかわいいな。

「今度からもっと頻繁に来るよ。だから今日はもう帰してくれない
かな？まだ仕事が残ってるんだ。」

「必ずじゃぞ 約束じゃぞ」

「ああ約束だ。」

満面の笑みが見れてよかった。

それから二週間に一度は行くようにした。まあもっと来いところねら
れるが。

くレオン side endく

だいぶ時間が跳ぶ

〈ナギ side〉

皆と別れてだいぶ経つが俺は今非常に困っている。

数ヶ月前から追っかけがいる。崖から落ちかけている少女を助けたんだが気に入られたらしく「私のモノになれ」と言われまくってる。しかもその少女がかの有名な『闇の福音』『不死の魔法使い』のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだもんな。厄介だ。それに「私のモノになれ」って言われても俺にはアリカがいるから無理なんだが・・そもそも現状態もアリカの独占力の片鱗に引っかけりそうで生きた心地がしない。

うっ・んなんかいい案ないかな。

ぶるるるる ぶるるるる

ん？レオンがくれた通信機か？

「誰だ？」

着信：レオン・D・オルレアン

ナイスタイミング！

「レオン久しぶりだな」

（おうちよつといいか？）

「なんだ？」

（実は昨日麻帆良の爺さんと仕事について話したんだけど、なんか別途で警備員欲しがってたんだけど当てあるか？無かったら別に良いんだが）

うお！これはチャンスじゃないか！？適当に呪いでもかけて後は爺さんやレオンに任せるか。そういやタカミチもそろそろ中学当たりに入学だったはず、ガトウの教育方針らしい。平和な日常も体験しとけてことかね。

「おう丁度いいやつがいるぞ　ただ連れていくのにちょっと時間かかるが・・・」

（別に次の学期が始まるまでに着けばいいらしいからまだ余裕だぞ。）

「まあ最低でも一週間以内に連れてくよ」

（了解。）

プープープー

よしっ早速罾でも作りますか！

くナギ side endく

くレオン sideく

ナギから連絡を受け現在麻帆良に向かっている。ナギが連れて来るのは、やはりエヴァンジェリンだそうだ。そのことを爺さんこと近衛近右衛門に言ったところひじょくに驚いていた。「フォッ!？」って。

爺さんの執務室に入るとソファーに座って震えている金髪少女とそれを笑いながら見ている爺さんがいた。

「爺さん誘拐は犯罪だぞ。」

もちろん冗談だが

「いやいやわし誘拐なんてせんよ、犯罪はせん」

ネギのことで労働基準法無視するくせに・・・

「おい」

ん？エヴァンジェリンか・・・無視してみよ。

「おい聞いているのか金髪！」

「爺さんナギはどうした？」

「あやつならもう行ってしもつたわい」

「無視するな!!！」

ガクガク

襟首を手で掴み両足をオレの腹に当てて身体全体を使って揺らしてきた。

「こら、カワイイ女の子がこんなことしちゃダメだぞ。」

襟を持って猫とつまむようにして身体から離す。

「かつかわいいだなんて・・・ってそうじゃなくて貴様は誰だ！そして放せ〜！」

ジタバタ

手足をばたつかせている姿を見ているのは楽しいがこれ以上イジルと後が怖いからやめとくか・・・

「フオッフオッフオ」

「おいジジイこいつは誰だ！」

「ではお互いに自己紹介でもしてもらおうかの、まずはレオン君からじゃな」

「はじめましてレディ。オレの名前はレオン・D・オルレアン。所属は紅き翼。二つ名は『森羅万象』が一番有名かな。」

レディとか・ハズツ！オレのガラじゃねえ。

「貴様が紅き翼最強のバグと言われる森羅万象か」

え？なにそれ初めて聞いたんだけど・・・orz

「おいどうした！いきなり黒い影背負って。」

「フオフオフオということで彼が君の後見人になるレオン君じゃよエヴァンジェリン。」

オレが後見人になってエヴァをエセ正義の味方共から守る予定である。

「こいつが後見人！？私は悪の魔法使いだぞ、こいつはそこらへんにいる偽善者共の筆頭だぞ」

「レオン君はマジステル・マギを名乗ってはおらんぞ」

「は？」

その反応は当然だろうね。オレ達紅き翼はマジステル・マギの目標みたいになってるしね。

「レオン君は名乗ってはおらんのだが本国の元老院が勝手に…」

「おい貴様その話は本当か？」

ああオレ？

「ああ本当だぞ。元老院の爺共が勝手に、一時はオレらのこと問答無用で指名手配したくせに。こういつときだけはさも自分達の配下に入っているように発表しやがる。」

「貴様は悪の魔法使いである私をどう思う？」

「別になんとも。」

「理由は」

「完璧な正義も完璧な悪も存在しないと思うから。オレにはオレの、エヴァンジェリンにはエヴァンジェリンの正義がある。エヴァンジェリンの場合はたまたま少数派だっただけ。それに化け物が悪ならオレも同じようなもんだ。」

「貴様が化け物？詳しく話せ」

「後でね。爺さん住む家はどうなってる。」

「空き家が一軒あるのでそこに住んでもらう。それでレオン君は教師で良いかの？」

「ん？オレも生徒だぞ？」

「フオツ！」

「だって教師なんてできないし。」

当たり前だろ前世では学生で、この世界来てからはずっと戦闘ばかりしてたんだぞ、内容なんかすっかり忘れてるよ。

「うゝむしかし姿はどうするのじゃ？さすがにそのままだと無理があるぞ？」

「ロード・ホルホル」

ドスッ

グニニ

背が縮み150cmくらいになる。

「これでOKでしょ。」

「うゝ、うむわかった。では中学一年に転入ということにするかのもちろんエヴァンジェリンも一緒じゃ」

「爺さんタカミチも来るなら同じクラスにしてくれ。」

「わかっとするよ」

「んじゃまたな爺さん。エヴァンジェリン行くぞ〜」

「あつ待て貴様！」

久々の学生生活楽しみだな。

レオン side end

京都と麻帆良（後書き）

詠春の口調がわからん。タカミチの年齢は原作での会話からタカミチをこの時期にエヴァンジェリンと同級生にしました。

手合わせ

「エヴァンジェリン side」

私は今日本の麻帆良学園にある一軒のログハウスにいる。理由はナギ・スプリングフィールドに“登校地獄”という変な呪いをかけられたからだ。おかげで魔力はほとんど無くなり、そこらの10歳のガキ共と同じ身体能力しかなくなった。

私は目の前の椅子に座っている男に声をかけた。

「おい貴様「レオン」あ？」

「だからオレの名前はレオンだ。レオンって呼べ。」

「ぐっ、ではレオンなぜ私の後見人となった」

「しいていえば君の身柄の保護のためだ。まあ他にも理由はあるが、」

保護だと！？この私をか？悪の魔法使いと言われ、また最強の魔法使いといわれる私を。

「貴様の保護などいらん！」

「魔力を封じられまともに戦えないくせに？」

ぐっ・・・

「まあオレが保護すんのはナギが呪いを解きに来るまでだ。3年く

らい我慢せい。」

「貴様はこの呪い解けないのか？」

魔力はナギ並であるから可能なはずだ。

「もし解くとしても卒業してからだぞ。」

ぷちっ！

バンツ！

「ふざけるな！」

「落ち着けよ。理由があんだから。」

「話せ！」

いちいち間をおきおって、テーブルを叩いたせいで手が痛くなってしまうた。

「まず卒業しないと解かないのはナギとの約束だから。エヴァンジエリンもあいつと約束したろ？OK？」

たしかに3年くらいならいいか。

「レオン自身の魔力で解けないのか？みたところやつと同量かそれ以上だが・・・」

「あの馬鹿が来なかったらやつてみるよ。オレでもできるかびみよ

「なんだけどね。ていうか解呪の仕方知らない。」

「アホー!!」

「へぶっ」

思わず殴ってしまったではないか。

そういえばこいつは自分のことを化け物と言っていたな。

「さつきジジイのところで言っていたが貴様が化け物とはどういうことだ？」

「ああそれね。一つ目はオレが不老だから。真祖じゃないから不死ではないけどね。二つ目はオレの使っている魔法じゃない力は悪魔の力だから。」

悪魔の力？

「不老はわかったが悪魔の力とやらは理解できん」

「うーんどっか暴れられるとこない？オレの力知りたいでしょ？」

「別荘がある」

久々に外の1時間が中では1日になる別荘を引っ張り出して中に入った。

「さすがエヴァンジェリン良いもの持つてるね。」

「ふっ当然だろう 早速だがどれ程のモノか見せてもらおうぞ！」

〈エヴァンジェリン side end〉

〈レオン side〉

今エヴァンジェリンの別荘で死合をしている。誤字じゃないよ。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 氷の精霊101頭 集い
来たりて敵を切り裂け。『魔法の射手・連弾・氷の101矢』」

ビュバツ！

『鏡火炎』

ボウッ

しゅっつっつうう

エヴァの魔法射手をオレの作りだした炎の壁で掻き消す。

「くっこれならどうだ！『氷神の戦鎚』」

『炎戒・火柱』

エヴァが投げってきた氷塊を火の柱で溶かす。

「こっちからいくぜ」

『神火・不知火』

ビュツビュツ

「ちっ！『氷爆』」

ボンツ

オレの投げた炎の槍をエヴァが相殺する。

「リク・ラク・ラ・ラツク・ライラツク 来れ氷精 闇の精 闇を
従え 吹雪け 常夜の氷精 『闇の吹雪』」

『火拳』

がががががががががが

これも相殺され双方ともダメージは無い。

「さすが闇の福音強いね。」

「くっそんな余裕な態度で言われても説得力ないわっ！」

でもエヴァは魔力が少なくなり少し辛そうだ。

勝ちましたよ。エヴァの魔力切れで。えっ描写がないって？仕方ないじゃん作者が書けないって言うんだから。打ちあいの後はオレは刀、エヴァは爪での体術勝負になった。

「何をしている」

「なんでもないよ。ところでオレの実力には満足？」

「貴様が全力じゃ無かったのが気に入らんが今の私を守るには十分過ぎるな。学園で貴様、いやレオンに勝てる奴などおらん」

「そりゃよかった」

「魔法は使わなかったがなぜだ？」

「純粹に悪魔の力を見てほしかったから。」

いちいち呪文詠唱するのがめんどいだけだが・

「エヴァンジェリン「エヴァだ」・エヴァに質問あるんだけど。」

これは聞いておかなければならない。

「なんだ？」

「フルネーム何て言うの？ほらAとKって。」

少し考えたけど小さな声で答えてくれた。

「エヴァンジェリン・アタナシア・K・マクダウエルだ」

意地でもキティって言わないつもりか？

「Kは？」

「・・・イ」

「え？」

「キティだ！」

顔真っ赤にしてちょっと涙目・・・ヤバいですグツとききました。

「キティ・・・ぷっ。」

「レオン笑うな〜！」

「そっ怒るなよキティ。」

「その名で呼ぶな〜！」

ガクガク

「二人きりの時しか呼ばないって。家族の親愛表現だと思ってくれ。」

「ふざけるな〜！」

アルの気持ちわかるな、弄ると楽しい。

「で、爺さんオレを呼び出した理由は？」

まあオレの仕事や立場の確認やエヴァについてだろうが・
ただ夜中に連絡してくるのは止めてほしい。

「まずはお主等の仕事についてじゃな」

「金は貰つぞ。」

「もちろんじゃよ『森羅万象』と封印されているとはいえ『闇の福音』が手伝ってくれるのじゃ多少の出費は易いものじゃよ」

「オレはエヴァとしか組まんぞ。後エヴァに攻撃してきた奴は潰すぞ。たとえ女子供でも容赦はしない。」

「皆には襲わんよに言っておくが・程々にしてほしいの〜」

学園長からの命令でも無視して襲ってくるやつはいるだろう。立派な魔法使いってやつはどうも過剰に悪を排除したがる。これもあの元老院の爺共の洗脳教育の賜物だろう。

「明日の夜時間あるかの？」

「特に無いな。昼間は買い物とか行くけど。」

「明日の午後11時に世界樹前広場に来てくれんかの？エヴァンジェリンも一緒にの」

手合わせかな？

「了解。せいぜい強い人揃えといてね。」

あっオレのこと言っなくなって言っの忘れた・・・まいつか。

レオン side end

学園長 side

わしは世界樹前広場で学園にいる魔法生徒・先生を前にしている。これからのことを考えると頭が痛い。今や世界の魔法使いの憧れである紅き翼のレオン君と今も昔も恐れられている闇の福音が一度に来るのじゃ騒ぎにならんほうがおかしい。

「皆に集まってもらったのは今度から夜の警備を手伝ってくれる者達を紹介するためじゃ」

「学園長、誰ですか？半端な実力の者ではかえって足手まといですが・・・」

「その点は問題無いぞ二人とも本国最強クラスじゃ それと例え誰であつても攻撃することは許さん」

学園にいるすべてを相手にしてもレオン君なら勝てると思うがの。エヴァンジェリンは封印されてるからちよつと辛いかの、まあそれでも並の魔法使いでは勝てんがの。600年の月日は侮れん。

「ジジイ来てやつたぞ」

「爺さんお疲れ」

「貴様等！学園長に失礼だぞ！」

はゞ早速やつてくれる。

「うるさいぞ雑魚が気安く話し掛けるな」

「なんだ・・・」

バタンツ

エヴァンジェリンに叫びかえそうとした魔法先生の一人が泡を吹きながら倒れた。

彼の仕業か・・・

「レオン君、君か・・・」

「うるさくなりそうだから気絶させたただけだ。それより紹介しなくていいのか？」

「うむ 少々トラブルがあったが進めるぞ 彼等が今度から警備を手伝ってくれることになったレオン君とエヴァンジェリン君じゃ」

ザワザワ

「はじめまして皆さん。オレは紅き翼の『森羅万象』ことレオン・D・オルレアンだ。でこつちが・・・」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

彼等が自己紹介するとざわめきが大きくなる。

「学園長！正気ですか！？レオン殿だけならわかりますが闇の福音といえは吸血鬼ですよ！？」

いかん！抑えなければっ

「そうですよ即刻殺すべきです」

ズガンッ

「ヒィ！」

あ〜やっぱりやってしまってたわ・・・おさめられるかのう・・・

〈学園長 side end〉

〈レオン side〉

ふざけたことを吐かした奴の足元に剣を一本射出した。剣といてもオレの身長のは倍はゆうに超える大きさだから威圧感半端ないが。学園長から程々と言われるので殺しはしないが殺気はこめる。

「おい貴様、オレの友人であり家族であるエヴァを殺すだと？」

「おい、いつの間に私とレオンは家族になった」

うるさいぞキティ、オレの独断でさつき決めたんだよ

「し、しかし闇の福音は真祖の吸血鬼で悪です。立派な魔法使いであるレオン殿からは排除すべき存在です」

うざいな

「まず大前提として間違っている。オレは立派な魔法使い、マジステル・マギではない。」

「そんな！あなたは大战を止め世界を救った英雄の一人ですよ！？」
英雄ねどこぞの未熟な正義の味方じゃないが英雄と呼ばれる者の
負の面を見ていないな・・夢を見すぎだ。

「君達の目指す立派な魔法使いはどいう存在だ？」

「それは弱きを助け悪を砕く存在です」

テンプレきました。

「では弱い悪はどうする？明日の食べ物に困り一欠のパンを盗んだ
子供は？子供のころから戦場に立つしかなく生きるために人を殺し
た者は？」

「そつそれは・・・」

「それに勘違いしているようだがおレやナギ、紅き翼の連中は帝国
やメガ口の魔法使いとかを殺してるんだ。英雄とは戦場で多くの命
を奪った存在だ。中には立派な魔法使いもいただろうし、巻き込ま
れた一般人もいたはずだ。その人たちの遺族からすればおレ達は悪
だ。」

おレが話すとみんな黙った。

これ以上はめんどいしエヴァを攻撃しなければ別に良いか。

「エヴァ帰るぞ。学園長後は任せた。」

「わかっておる」

side ends

手合わせ（後書き）

駄文だ。

こんな小説をお気に入り登録してくださった方が4000人を超えました。感謝です。これからも応援お願いします。

日常

レオン side

顔合わせから数日がたったが学園内からの接触はない。ただ学外からエヴァを狙ってきた奴は大勢いた。どっから情報が漏れたんだか・
・まあオレにとっては雑魚ばつだから別にいいが

「レオンどうした？」

「いや、ガトウから連絡があってタカミチが来るんだけど稽古つけてやってくれてって言われたからどうしようかと思ってね。」

「タカミチとはどういうやつだ？」

「一言でいえば非才。あいつは生まれながらにして呪文詠唱ができない。モノの習得も早いとはいえない。」

「では体術くらいしか教えることはないではないか」

「まあまずは体力作りからだな。」

「ふむまあ打倒だな」

「あつ別荘貸してね？放課後とかだけじゃまともに来ないから。」

「まあいいだろう良い暇潰しになる」

「あともう一つお願いが・・・」

「なんだ」

「別荘の作り方教えてくれない？自分の欲しいんだわ。」

自分の好き勝手できる空間が欲しいじゃん。秘密基地だよ、秘密基地。

数日後タカミチが来た。

「お久しぶりですレオンさん」

「久しぶりだなタカミチ元気にしてたか？」

「もちろんですよ。それとガトウさんからの伝言で「好きにしてくれ」だそうです」

タカミチはなんのことかわかってないな・・・

「了解。んじゃオレの住んでるとい行くぞ。」

「はい」

別荘内

「キティ、タカミチ連れてきたぞ。」

「ええいその名で呼ぶなと何度言えばわかる！」

何度言われても呼ぼうと思っています。

「あの〜」

そうだったな。

「この人がこの別荘の持ち主であり、今度お前の同級生になり、今はオレの家族である、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル嬢だ。」

「・・・え？あの、その、ええと・・・」

良い感じでパニックってるね。

「エヴァンジェリンって・・・あの有名な？」

「そつだぞ『闇の福音』『不死の魔法使い』『人形使い』だ。」

「えええええええええつ！！」

ガトウ教えてなかったのか。

「落ち着いたか？」

一通り驚いたのかだいぶ落ち着いたようだった。

「はい」

「ガトウからお前が学園にいる間は面倒見るように頼まれてるからなんかあったら言え。それと稽古つけてやるんだが・・・お前はガトウのようになりたいのか？ガトウを超えたいのか？」

「え？」

ガトウを目指すなら居合拳と感卦法と戦闘経験の蓄積だけだが、ガトウを超えたいならそれにオプシオンがつく。

「そのうち改めて聞くから答え出しとけよ。」

その後タカミチをエヴァと一緒に扱いたりしてたら新学期、つまり学校が始まった。

「まったくなぜ私がガキ共と一緒に勉強せねばならん」

今は放課後で家でお茶を飲んでる。

「人生の休暇だと思えば良いだろ？まあ時折魔法先生からの殺気をこめた目線があるけどね。」

学園長からの命令が効いているからか隣にいるオレを気にしてなかはわからないが行動に出ないのは面倒が少なくなってる良い。

「あの程度の殺気など無いに等しい」

戦場に出たこともないやつは殺気なんかは殺気とも呼べないくらいだからね〜

「そうだ今度の週末用事があるからいなくなるね。」

エヴァとタカミチに構いすぎててテオドラに会いに行くの忘れてたんだよね〜何て言われるか・・・

「なに！どづいことだ、ずっといるのではないのか！？」

「ちよっ落ち着けて」

身体弄って身長低くなってるから倒れる。涙目で上目遣いやめてくれ、普段とのギャップで・・・ぐはっ！

「ちゃんと帰ってくるから。」

「・・・絶対だぞ」

「もちろん。」

ぐしゃぐしゃ

「撫でるな！」

「へいへい。」

帝都到着！

どんな顔して会えばいいんだろ・・・とりあえず謝ろ。

ガチャ

バツ

「すみませんでした！」

え？土下座ですよ。女性は怒らせたら怖いのですよ。

「ん？レオンか？」

「そうです。」

「そうか・・・そのままでおるのじゃ」

タッタッタッタッ！

テオドラの部屋結構でかいから走れるんだよね

「なげもつと早く来なかったのじゃ〜！」

ダンッ！

グシヤッ！

「ガハッ！」

・ 跳び上がりからの踏み付けは止めてくれ、土下座してるから顔が・

「毎回！」

ぐし

「わらわが！」

げし

「どれだけ！」

ドカツ

「お主に！」

ボカツ

「会えることを！」

ゴキヤツ

「ちょタンマ。」

「楽しみにして！」

ボグワツ

「いたと！」

メキヨツ

「テオ・・・」

「思っておるのじゃ～～～～！」

グシャツツツツ

・・・

「レオン？」

「・・・」

返事が無いまるで屍のようだ

「レオン！死ぬでないぞ、いったい誰がこんなことを」

「・・・お・ま・・・え・・・だ。」

ガクツ

「あゝひどい目にあつた。」

こきつこきつ

首に違和感あるけどまあ大丈夫だろう。

「すまなかつたのじゃ」

なんかテオドラが物凄く凹んでる。犬耳や尻尾があれば確実に垂れ下がってる。

大戦期より成長し女性的になりだした少女がへたりこんでる姿は絵的にマズイ。

それにオレが来るの忘れてたことにも原因があるからやめさせないと。しかもこのあとまた凹ませる可能性があるんだよね

「テオドラ？もう大丈夫だから元気だせ。」

「怒っておらんのか？」

半泣きで首を傾げるな

「もちろんだよというか元から怒ってないよ。」

「わかつたのじゃ。して今日はどうするのじゃ？」

「買い物でも行くか？」

普通なら皇女が自ら買い物に行くのはアウトだがオレがついていく場合だけテオドラの親から許可が下りている。テオドラの父上からは妙に信頼がおかれていて愚痴を聞いたりすることもある、テオド

ラが反抗期だとか奥さんが冷たいとかe t c。

がやがや

「やっぱり街はよいの」

「来たの久しぶりか？」

「そうじゃのレオンがおらんとかなか来れん お主がおらんと兵士をわんさか連れて来ないといけないからの、妾はいらないとゆうておるのじゃが」

街の普段の様子を見たいらしくテオドラは兵士を連れて歩くのは嫌いなんだそうだ。オレがいるときは護衛はオレで十分、認識阻害魔法もかけるので下手なことをしなければバレもしない。オレがテオドラの名前を呼んでも他人には違う名前に聞こえるようになってい

「おいテオドラ。」

「・・・」

返事が無いので向くと露店のアクセサリを見ていた。銀細工の店っぽいな。

「テオドラこれほしいのか？」

そう言ってペアのブレスレットを手にとる。派手過ぎないが存在感

はあり細かいところまでしつかりと作られている。着けてる人を栄えさせる造りだ。これなら公私ともにつけていても問題なさそうだ。

「お客さんお目が高いね！これは俺が一週間かけて作ったものだ。そこら辺の高級店にも負けない出来だよ。」

「いい出来だな。いくらだ？」

「こんなもんだな」

さすがに他の製品とは違うね。でもこの出来でこれは安い。

「レオンいいのじゃ、見てただけじゃ」

値段見てあからさまに気落ちするなよ・・・ああテオドラお小遣制だっけな。

でもチラチラと目がブレスレットにいつてるぞ。

「おっちゃんこのブレスレット、ペアで買った。」

「え？」

「まいどー！」

「よいのか？」

「これぐらいで気にすんな。」

「よかったね嬢ちゃん。彼氏が買ってくれるって！」

いつの間にもオレはテオドラの彼氏になった・

「え？ かつ彼氏？ いや・・・でも・・・レオンなら・・・」

「おい何ブツブツ言ってるんだ？ さっさと腕だせ。」

「う・・・うむ」

すうう

オレもはめてっと

「よし、よく似合ってるぞ。」

「あ、ありがとうなのじゃ レオンも似合ってるぞ」

「見せつけてくれるね」

いつの間にかちょっとした人だけが出来てた。 恥ずつ。

「じゃあなおっちゃん。 良いもん買わせてもらった。」

「おう また機会があったら寄ってくれ 兄ちゃん達みたいな美男美女なら何時でも歓迎だ」

「テオドラ行くぞ。」

レオン side end

テオドラ side

レオンにプレスレットを買ってもらったのじゃ。
それに店の人からはわらわ達が恋人に見えたらしいのじゃ”
嬉しくてまだ顔がにやけてしまう。

「テオドラどうしたさっきからニヤニヤして。」

「何でもないのじゃ」

むぎゅっ

「腕に引っ付くな歩きづらい。」

胸を押し付けておるのに慌てもせん。

「嫌か？」

「嫌じゃないんだが胸があたってるから。」

む、気にはなっておったのか・・・ポーカーフェイスじゃな。ムフフ・

「当たておるのじゃから当然であるっ」

「帰ったらやめるよ。お前の家族から何言われるかわかったもんじゃない。」

妾は別に言われても良いのじゃがな。

「わかったのじゃ。でもその分今くつつくのじゃ」

むぎゅ〜

「もう帰るのか？」

あつという間に時間が過ぎてレオンが帰ってしまうのじゃ・・・さみしいのう。

「明日からまた学校だからな。欠席は良くない。」

「わらわも行ければよかったのじゃがな」

そうすればレオンとずっと一緒じゃ。

「さすがにそれはダメだつて。」

「仕方ないの。次来るのは何時になるのじゃ？」

「……あの、なんだ。」

なに言いよどんでおる。

「はつきりせい」

「しばらく来れない。」

「……え？今何と言った？

「なんでじゃ！わらわのことが嫌いになったのか？」

嫌じゃ嫌じゃ嫌じゃ

「違うよ。麻帆良からゲートまで行って帝国まで来て、また帰りにゲートまで行って麻帆良まで帰るのが大変なんだよ。時間もかかるし。だからこれから3年間は春休みと夏休みと冬休みの3回来ることにする。わかってくれるか？」

ホントは嫌じゃが困らせて嫌われたくないし「信じて待つのも良い女の条件」とたしかアリカが言っておったしの。我慢するのじゃ。

「わかったのじゃ我慢する」

「ありがとうな、テオドラ。」

ううこの笑顔は反則じゃ

相変わらずカツコイイのう。

「じゃあなテオドラ。」

「うむ、またなのじゃ」

行ってしまったのじゃ。

「姫様」

「どうしたのじゃメイ」

メイはわらわの付き人の一人じゃ。

「これはチャンスです」

「どうしてじゃ？」

レオンに会えないのがなぜチャンスになるのじゃ

「長い間会わなかった方が姫様の成長ぐあいがよりわかります。おそれながらレオン殿は姫様を妹のように思っているようです。しかし久しぶりに会って女性として成長した姫様を見ればレオン殿も一人の女性として見てくれるはずですよ」

ふむ一理あるの・・・

「よし！大人の女性目指して、ふぁいと・おくのじゃ」

日常（後書き）

まだネギは出てきません。あと1〜3話が書いたら出てくる予定です。

エヴァ成長！？（前書き）

いまいちです。

エヴァ成長!?

レオン side

ゴソゴソ・・・カキカキ・・・

「うっしゅー出来たー!!!」

やっと別荘ができた!結構時間かかったけどエヴァのに比べて遜色無いのができた。

ガチャ

「レオンどうした叫び声上げて」

「おっキティ、遂に別荘ができたんだ。」

「その名で呼ぶなと・・・ええいめんどくさい、それでどんな感じだ?」

エヴァには作り方だけ教えてもらってそこからノータッチだったかな。

「良い感じだよ。感想は見てから言ってくれ。」

フォンツ

「随分と普通だな レオンのことだから変に作ると思ったんだが・
」

見た目は普通の南の島（原作7巻でネギ達が行った所みたいな感じ）である。砂浜、岩場、海、家数軒、森、ちよつとした山などがある。

「これから色々追加する予定だけどね。」

「時間はどうなってる?」

「キティのと一緒で外の1時間が中の1日にしてある。」

「ふむ、いい出来じゃないか」

「時間かけたからね。次は家ね。」

「おい！なんだここは!」

「宝物庫?」

オレ専用の家の一室に案内したら怒鳴られた。

「なぜ神話や伝説にでてくる武器があるんだ!？」

「オレの持ち物で使わないから飾っておこうと思って。あれ?説明してなかったっけ？」

「されてないわ!」

悪魔の実は説明したけど王の財宝は説明してなかったっけか。
ゲイト・オラ・バヒロン

「オレの背後からモノが出てきたことあるでしょ?その異空間の中に閉まってあったんだよ。でもここに置いてあるやつは使うことがないやつだから飾ってある。」

有名所が多く置いてある。もちろん普通の剣や槍、刀も飾ってある。デュランダル、アスカロン、アロндаイト、天叢雲剣、方天画戟、干将・莫耶、トライデント、ブリューナク、タラリア、空飛ぶ絨毯、e t c . . 。

そのうち紛争地域や海外で銃火器も仕入れて飾る予定である。

趣味だよ、悪い!？ 武具や銃器集めは男のマロ・ゲフンゲフン・ロマンなんだよ。

「世の中の考古学者や歴史家が見たら卒倒するな・・・」

「見せないから良いんだよ。」

ドゥドゥドゥドゥ

「ほらっタカミチィッ避けねえと死ぬぞ〜！」

別荘でタカミチをイジメ…訓練してる。

「ちょっとレオンさん待って下さ」おらっ「うわっ危ないですよ〜！」

ドカドカ

上空からの魔法の射手の雨である。

「危ないのは当たり前だろ！回避訓練だ。」

「うわっしまっ」

ドカンッ

あゝ気絶したか。だいぶ避けるの上手くなったな。次は感卦法と居合拳の練習かな。気と魔力の効率的運用も同時進行か・・・

「キティ。」

「なんだ？」

「成長したくない？」

「ボケたか私は真祖だぞ一生このままだ・・・」

声色が暗くなる。

やっぱり気にしてるんだな。

「オレなら出来るぞ。」

「どっやって？」

「ホルモンとかをちょこっといじる。自演してみようか？」

「ロード・ホルホル」

『エンポリオ・女ホルモン』

ドスッ

ぐにゅにゅにゅ

「ほら出来たでしょ？ちょっとこの服じゃ胸が苦しいわね。」

制服だったからワイシャツが苦しい・・・

「・・・はっ！レオン何をした！」

思ったよりフリーズ短かったな

「自分の身体に女性ホルモンを注入しただけよ？」

女言葉になってるのは大戦期の情報収集で多用してたからこの姿になると自然になる。

「そんなにすぐ効果が出る訳無いだろ！そもそもなぜ出来る！？」

「そんなこと言われてもすぐに出るんだからしかたないでしょ？それでなんで私が肉体変化が出来るかというとね、これも悪魔の実の能力の一つだからよ。」

「あの反則だらけの実か、斬られても平気だったり、火になったり・・・それで今の能力は何なんだ？」

「今の私は性別・体温・色素・成長・テンションとかを自由自在にできる人体のエンジニアよ。例えば、顔だけを大きくしたり、性別を変えたり、肌を綺麗にしたり出来るわ。」

そういえばタカミチ別荘で老けすぎるから少し若くしようかな。

「私は吸血鬼だ人とは違うぞ」

「大丈夫よ。この間ネズミで性別変えたら変わったから。」

「私はモルモットか！」

スパンツ！

「痛いじゃない。キティ、ハリセンはヒドイと思うわ。」

ハリセンで突っ込まれた、どっから出したんだろ。

「うるさい、それといい加減元に戻れ！気持ち悪い」

エヴァには不評だったか、アルからは好評だったんだがな。

「はいはい。」

『エンポリオ・男ホルモン』

ドスッ

ぐにゅにゅにゅ

「まあそういう訳だから成長はさせられるぞ？」

男に戻ってエヴァに確認をとる。

「き貴様が、どっどっしてもと言っならやっても良いぞ」

吃ってますが・・・というか素直じゃないな。

「毎日少しずつ成長させるから。」

「何故そんな面倒臭いことをする？一気に成長させれば良いだろ」

「一日で成長したら周りが驚くだろ。一気に成長したいなら卒業してからだぞ。」

エヴァってちょっとぬけてる所あるよね。たしか原作でも魔力無くなってるのに空飛ぼうとして顔からこけてたし・・・あく原作忘れかけてる読んだの五年以上も前だからなくあとで書き出して王の財宝に保存しとこ。いや探してないが原作のコミック、王の財宝の中にしまってたあたりしないかな？

「そうだったな、では毎日少しずつで頼む」

「3年間はゆっくり成長させるから。」

「任せる」

嬉しそうだね、顔がにやけてるぞ。

ブルブルル

「なんだ爺さん。」

(実はのう侵入者が多くて手が足りないのじゃ、出てくれるかのう)

「どうしたレオン」

「爺さんからの救援要請だ。」

(エヴァも一緒に頼むぞ お主達をよく思っておらん者の印象も良くなるかもしれん)

オレはむしろ逆に悪くなる気がするがな。

「どうするキティ?」

「暇潰しに行つてやるか」

「爺さん今から行くぞ。場所はどこだ?」

(おお行つてくれるか、場所はいつもの森じゃ)

「キティ行くぞ〜」

レオン side end

魔法先生の一人である男性は50を超える妖魔と対峙していた。学園長からは10体ほどと連絡があったが手違いがあったらしい。増援が来るまで持ちこたえなければならぬ。だがすでに魔力は尽きかけていて相手も待つてくれないようだ。

「悪いのう兄ちゃん頑張ったみたいやけどしまいやな。怨みは無いんやけど喚ばれたからにはしかたないんや」

ブンッ

2メートルはある大剣が振り下ろされた。

「………?」

男は殺されるのを覚悟し目をつぶったがいつまでたっても衝撃が来ないので恐る恐る目を開けると一人の金髪の男が大剣を一本の刀で止めていた。

「よう、無事か?」

「は、はい」

それは、片手に一本、そして腰に二本の刀を差したレオン・D・オルレアンであった。

レオン side

危なかった。あと少し遅かったら死んでたよこの人。タカミチ連れて来るために寮に寄ったのがまずかったかな。まあ無事だから良いや。

「なんや今度はあんさんが相手かいな」

「おう全員相手してやるよ。かかってきな。」

オレがそういうとガハハハと皆さん大爆笑！

「冗談でもおもしろいで後悔すんなや」

殺気が一気に上がったな。

それにしてもなんで関西弁なんだろ？

「そつちがなっ！」

ダンッ！

オレは瞬動で近づき斬る。

斬っ

「何！こいつ強いぞ」

相手が騒いでるが関係ない。

『三刀流：艶美魔・夜不眠』

ユラリ・・・ユラリ・・・

『鬼斬り』

ズバン！！！！！！

「ぐわあ」「ごわっ」

約十体を一撃で倒して次に移る。

「困め！いくら強うても人間や数で押せ！」

「困んでくれるなら好都合だ！」

近づいて来るのを待ち・・・

『三刀流：龍巻き』

ドゴオオオン！

回転切りをし、旋風により吹き飛ばす。

「まだ半分もいってないか。」

能力使えば瞬殺だが剣技や足技を衰えさせないためにたまには純粹に殺・・・ゲフンやらないとね。

レオン side end

ある妖魔は目の前の光景が信じられなかった。自分を含め50を優に超える、いや超えていた妖魔がたった数撃で半分に減らされた。最初にいた西洋魔術師はたいしたことなく倒せるとこまでいった、問題はその後だった。・男と少女そして青年になりかけの男がきてから戦況が逆転した。少女と男（小）は戦ってもいないのだ。

傷一つない男に畏怖しか浮かばなかった・・・

タカミチ side

夜に宿題を終わらせてたらレオンさんに拉致られた・・・
到着したのは森の中の少し開けた場所だ。一人の魔法先生が殺されそうだったがレオンさんが寸前で受け止めてた。

「タカミチあの人間を助けるぞ」

「はっはい」

エヴァンジェリンさんが助けに行くことに驚きつつも後についていく。

「無事か？」

「なつ貴様閻の福音！どうしてここに！？」

「依頼だ」

エヴァンジェリンさんももつとちゃんと説明すればいいのに・・・恐らくエヴァンジェリンさんを快く思っていない人達の心象を良くするためだ。

レオンさんが後見人になっているから表だつての批判はないが魔法関係者から良く思われてない。

僕が二人に師事していることを聞いた魔法先生の中には「エヴァンジェリンなんか教わっていたらろくなことにならない。今からでも私達のところに来なさい。」って言う人もいた。もちろん断つたが・・・

「タカミチく見てろよ」

考えている間に敵の数が一桁になっていた。レオンさんは傷一つも負っていない。というか敵を見ましようよレオンさん、いくら避けられるっていつても・・・敵さんかなり怒ってますよ？

「ええかげん紙みたいにヒラヒラ避けとらんでこつち見んかい！！」

「オレがお前に教えようと考えている技だ。」

『嵐脚・凱鳥』

ズババババツ！

レオンさんが片脚を見えない程速く振りぬいたら斬撃が飛び、残りの妖魔と奥の木を十数本切り裂いた。

「流石だな魔力や気の強化無しでこの強さか」

「なっ！身体強化無しなのか！？」

魔法先生はレオンさんの強さを見誤ってたみたいですね。エヴァンジェリンさんは・・・しょっちゅう別荘で戦って知ってますね。

「ふー終わりつと。・・・術者は逃げたか。タカミチ最後のちゃんを見てたか？」

「はい あれって大戦期に時々使ってたやつですよね？」

たしか戦艦や建物を斬ってたような気がする。

「まあ細かいところでは違うが使ってたな。これは純粋な体術だからお前にも出来るぞ。脚で鎌風をおこすだけだ。覚えといて損はないぞ。」

「そんな簡単に・・・」

凄く軽く言ってますけど脚で鎌風ってよっぽどですよ？

「練習は居合拳がさまになってからな。」

「はい！」

「一つずつだ、一つずつ。」

「じゃあオレは爺さんに連絡してくるからエヴァとタカミチは各自帰っとけ。」

そういうとレオンさんは影のゲートできえた。

あっ魔法先生はどうするんだろ？

タカミチ side end

エヴァ成長！？（後書き）

宝具は各自で調べてください、お願いします。

タカミチが少し前にガトウを超えたいとレオンに言ったため、レオンは嵐脚+ をタカミチに教えるつもりでいます。

出会い、そして別れ（前書き）

思ったより長くなりました。

出会い、そして別れ

レオン side

早いものでオレとエヴァ、タカミチは卒業式を迎えた。

「もう卒業か。」

「私はナギが来ないとまたやり直したがな」

エヴァはふて腐れてる。ちなみに今のエヴァの身長は150にちょっと足りないくらいである。成長ホルモンのおかげでだいぶ大きくなった。2年の身体測定の際に成長していることに感動して泣いたエヴァは記憶に新しい。

「まあまあ。それでタカミチはこのあとどうすんだ？」

「この後ガトウさんと合流してから決めます。まあ各地を旅することになるとは思います。」

「ガトウや他のやつにもよろしく言っといてくれ。何かあったら爺さんかテオドラにでも連絡してくれ。そうすれば連絡は着きやすいはずだ。」

「わかりました。レオンさんはこれから何処へ？」

「とりあえず行ったり来たりしながら活動しようかと思ってるよ。」

「おいレオン！居なくなるのか？」

ぐっ・・・

エヴァが悲しそうな目で訴えてくる。レオンは998のダメージを受けた。ライフが1残った。

「暇があつたら様子見に来るよ。あつもし学園のやつから攻撃受けたら爺さんのところに行け。脅・・話はしてあるから大丈夫だ。チャチャゼロも動ける様にしておくから。」

ちなみに今だ登場してないがチャチャゼロというのは、エヴァの従者で性格に難が有るが一流の剣士?である。人形だが普通に強い。

「わかった。待ってるからな」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「久しぶりだな詠春。」

「ええお久しぶりですレオン」

現在詠春のいる京都に来ている。

「それにしてもいつの間に子供つくってたんだよ。」

「レオンが麻帆良に入学して少ししてから産まれました。お義父さんは見に来られましたか聞いていませんか？」

「全く聞いてない・・・」

「ははは・・・」

爺さん後で覚えとけ！

ブルッ！

「なにか嫌な予感がするのう」

ある学長室にいる年寄りがそんなことを言って結界がちょっと強化されたのは余談である。

「それでレオンに頼みたいことはですね」

「子供の護衛か？」

「わかってましたか・・・」

「まあそれくらいしか無いだろ。裏のことは教えるのか？」

原作で知ってるけどこれは確認しとかないといけないことだ。

「子供、木乃香というんですがあの子には知らせないで頂きたい」

やっぱりか

「無理だろ。つつか教えないと逆に危険だぞ？」

利用しようとする輩はどこにでもいる。利用対象が自衛の手段を持たないのであればなおさらだ。

「わかっています。ですがあの子には何も知らずに生きて欲しいのです。せめて木乃香自身が気付くまでは・・・」

「護衛に関してはOKだ。ただ裏についてのことはいくつか条件がある。」

「何でしょうか？」

「簡単なことだよ。一つ目は木乃香ちゃんが中学を卒業したら詠春がちゃんと裏のことを話すこと。木乃香ちゃん自身のことだから自分で道を決めさせる。」

「二つ目は木乃香ちゃんに女の子の護衛を最低でも一人はつける。」

裏のことに関わらないとしても木乃香ちゃんが頼ることのできる親友がいたほうがいい。正確には木乃香ちゃんと利害関係なく純粹に友になれ、かつ裏のことも知っている子を護衛につかせる。」

「・・・わかりましたお約束します」

「うしっ！じゃあ早速遊び相手兼護衛しますか。」

「ロード・ホルホル」

『エンポリオ・身体縮小ホルモン』

ドスッ

グニニニ

エンポリオ・身体縮小ホルモンは注入すると頭脳は大人身体は子供の名探偵の如く小さくなる。縮む具合は調整できる。

「相変わらず便利な能力ですね」

「かなり使用頻度は高いね。」

これ魔法じゃないから見破られることないしね。ちなみに今の姿は小学校3、4年くらいです。

レオン side end

く木乃香 sideく

うち近衛木乃香ゆうんよ。年は4才や。お父様は近衛詠春、おじいちゃんは近衛近右衛門いうんよ。
うちの今の願いはお友達を作ることや！

「木乃香こつちに来なさい」

いつも通り一人で遊んどるとお父様に呼ばれたんよ。
あれ？お父様の横にいる男の子誰やる？うちより年上の子や。外人さんやし初めて見るわ。

「お父様その人だあれ??」

「この子はレオン君だよ。レオン君の両親が仕事で忙しくて家で預かることになつたんだよ」

「初めまして。レオン・D・オルレアンです。歳は9才です。よろしくね。」

「初めまして近衛木乃香です。4才です」

くしゅ

「ちゃんと挨拶できてすごいね。」

撫でられてもうたけど手え暖かいなあ、お父様に撫でられてるみたいや。

「じゃあ私は仕事に戻りますね。レオン君よろしくお願いしますね。木乃香、レオン君の言うことちゃんと聞くんだよ?」

「はい、わかりました。」

「はいな」

う〜んどないしょ?レオンやから・レオン兄、レオ兄、レッチちゃん、レオっち、・・・・やっぱりレオ兄やな。

「木乃香ちゃんどうしたの?」

「ほえ?」

「いやなんか考え込んでたからさ?」

「あのな〜なんて呼ぼうかとおもつてな〜考えとつたんよ」

「オレのこと?」

「そつやで」

「決まったの?」

「もちろんやこれから『レオ兄』って呼ぶことにするわ」

だめやるか？お兄ちゃんおらへんから呼びたいんやけどな

「いいよ。じゃあ今日からオレが木乃香ちゃんのお兄ちゃんだ。」

やったわ！お兄ちゃんゲットや！何して遊んでもらおうかな

〈木乃香 side end〉

〈詠春 side〉

レオンが護衛についてから1年がたちました。木乃香はすっかり懐いて本当の兄妹みたいです。

半年ほどたったときに桜咲刹那君を木乃香の護衛兼遊び相手につけました。最初は少しぎこちなかったですが今はすっかり仲良しです。レオンが言っていた相互に頼れる親友になっってくれると思います。三人とも仲良く遊んでいるのを見ると心が和みますね。ただし木乃香がレオンに飛び掛かったり抱き着いたりするのを見る度無性にレオンを斬りたくなります。

「詠春。」

「どうしましたレオン。木乃香がなにかしましたか？」

昼間に話し掛けて来るなんて珍しいですね。いつもは夜に大人に戻って酒飲みに来るぐらいなのに・・・

「いや別になんも無いよ。今は刹那と二人で遊んでる。」

「そうですか、それにしても最近遊びと称して合気教えてるんですね・・・」

「今から身体に動きを染み込ませておけばいざという時もケガする確率下がるだろ？それに合気なら習ってても違和感ないだろ？」

さすがですね、レオンは木乃香のことを真剣に考えてくれている。確かに合気道なら一般人でも習っている人はいますからね。

「そうですね、にしても誰に習ったんです？たしかあなたは合気道使えなかったはずですし」

「ああエヴァに習ったんだよ。麻帆良にいた時ヒマだったし。」

「そうでしたか」

そういえば『闇の福音』の麻帆良にいる間の後見人でしたね。関西では私しか知りませんが

「ところでナギ達が行方不明ってホントか？まあ死にゃあしないだろうが・・・」

「ええ現状私とレオン以外の紅き翼は皆連絡取れずです。魔法世界にいると思われませんが・・・」

捜したいのですが私はここを動く訳にもいきませんからね。

「なんか嫌な予感するからオレ行ってくるわ。」

「ええお願いします」

「木乃香と刹那には急にいなくなって悪いって言っといてくれ。後、また必ず会えるから元気にしとけよって。」

「わかりました伝えておきます」

「またな。」

ピカッ！

行きましたか・・・それにしても光の速さで移動とは相変わらず反則ですね。

たっ たっ たっ た

「お父様へ帰ったえへ」

「長ただいま戻りました」

「お帰りなさい木乃香、刹那君」

「あれ？お父様、レオ兄は？」

もうちょっと早ければ見送れたんですがね。

「実は急な用事が出来て帰ってしまったんだよ」

「「え？」」

二人の目に涙が出てきました。引き止めなかった私の責任も有りませんが今度会ったら斬魔剣を喰らわせましょうか。

「『急にいなくなってゴメン。必ずまた会えるから元気にしててね』
だそうです」

「またあえるん？」

「彼が約束破ったことあるかい？」

「「ないっ」「」

「わかったえ うちまたあえるまで元気にしとる」

「う、うちもです」

二人とも恋する女の子ですね・・・やっぱりレオンとは一度話し合う必要がありますね。

く詠春 side endく

くレオン sideく

京都から魔法世界に来てから1週間たったがいつこうに脚取りが掴めない。早くタカミチとガトウ、そして姫子ちゃんと合流しないと原作どうりだとガトウが死ぬ・・・原作で詳しい説明無かったから追われていた相手は知らないが『完全なる世界』の残党が可能性大だと思う。大戦後も回復魔法に力を入れて習得、改良をしてきたため大半は助けられるようになった。

つうかなんで連絡つかねえんだよ！麻帆良の爺さんにも連絡無いらしいし。みんなのビブルカード作っとけばよかった！くそっ！！あとの頼りはオレ作製のネックレスか・・・。半年以上会ってないで半径5 km以内に入ると相互で光るようになってる。

「風潰しに捜すしかないか・・・」

くレオン side endく

くタカミチ sideく

「グスグス・・・ガトウさん・・・」

今、目の前でアスナちゃんが泣いている。

追っ手から逃げて来たけど師匠であるガトウさんを失った。敵の攻撃から僕とアスナちゃんを庇ってケガを負った。師匠は僕達を逃がすために残って戦った。追っ手が来ていないからうまくいったんだと思う。

アスナちゃんは師匠と別れてからずっと泣いている。僕も泣きたいけど師匠からアスナちゃんのことを頼まれているから今は泣くわけにはいかない。

パアパアアアアア！！！！

っ！ネックレスが光った！近くに紅き翼の誰かがいるのか！？

「タカミチっ！姫子ちゃん！」

「レオンさん！」

その直後に来たのはレオンさんだった。

「おいタカミチ、ガトウはどこだ！」

「師匠は僕達を逃がすために……」

「くそっ！間に合わなかったか……場所はどこだ。」

「ここから東に一日くらいですが……まさか行くんですか！？」

「一日たって敵が来ていないのならガトウがうまくやったんだろ。迎えに行かないとな……。お前達はここで隠れてろ。」

「レオン！ガトウさんを助けて！」

アスナちゃんがレオンさんにしがみついた。レオンさんはアスナちゃんを軽く抱きしめた後頭を撫でた。

「最善を尽くすよ。」

ピカッ！！

「アスナちゃん 今はレオンさんを待とう」

「うん」

さっきのはレオンさんが得意な光速移動だ。文字どおり光の速さでの移動だ既にガトウさんのところについているはずだ。でもレオンさんは「最善を尽くす」と言った。おそらく師匠は……

〈タカミチ side end〉

〈レオン side〉

ドゴンッ！！

光速移動でガトウがいると思われる場所に行くと近くで爆音がした。ガトウの豪殺居合い拳の着弾音だと思う。

すぐに音のした方へ向かうと無事な所が無いくらいボロボロのガトウと50体ほどの悪魔がいた。おそらくこの数倍の悪魔がいたんだろう、戦闘痕で元の地形がわからなくなってる。

「っ！！ガトウ！」

次の瞬間ガトウが崩れ落ちた。

オレはすぐさま駆け寄り抱き留めた。

「レ・・・オン・か・・・がはっ」

「喋るな！すぐ治療始めるからな。」

「ナンダオマエハ、ジャマスルナラキエテモラウ」

治療をしようとする悪魔が襲い掛かってきた。

「ちっ！ガトウ少し待ってるすぐに終わらせて治療してやっからな。」

「ロード・メラメラ」

「吹っ飛べ！」

『火拳・螺旋』

火拳・螺旋：火拳で放出される炎に回転を加えたやつ。ただ放つより範囲は狭くなるが貫通性、射程、破壊力が格段に上がっている。

ポウンツツツツ！

半分以上を吹き飛ばした。

「次！」

『劫火』

劫火：無数の火の玉を放つ。ただし火は青色で一発一発の威力はメラメラの実で威力が上がった魔法の射手「火」より高い、誘導性は無いが無くても良いくらい大量に生成するので関係ない。

ドガガガガッッッン！！！！！！

「ふう終わったか。」

相変わらず劫火は威力がすごいな、能力を鍛えたら炎を青くすることができるようになったが・・・

「ガトウ死ぬなよ。」

すぐに治療を始める。

「レオン」

「なんだ？」

「…頼みがある」

「アホ、治してやるから黙ってる。」

「無駄だよ…自分の身体だ…よくわかグフツ！」

「喋るな！後でいくらでも聞いてやるから。」

死なせてたまるか！原作で死んでるからって死んでいいはずがねえ！！

「タカミチと…嬢ちゃん…を頼んだ」

「あほかガトウ！お前が死んだらタカミチが、アスナが、それにオレだって悲しいんだぞ！」

オレが叫ぶとオレの手にガトウの手が置かれた。

「すまない…でも…お前だから頼むんだ」

オレの手を握るガトウの手からはもうほとんど力が伝わって来ない・
・それに目の焦点が合っていないもう目も見えてないんだろっ。
それでもガトウの目は真剣さと優しさが混ざり合っていた。

「わかった…あの2人は任せろ。」

「…ありが…と……………」

ばさっ……

ガトウは安心した顔で息を引き取った……

レオン
side
ends

記憶（前書き）

この話は賛否両論あると思います。

記憶

レオン side

ガトウが死んだ後オレはガトウの遺体を運んだ。遺体を見たアスナちゃんとタカミチは号泣した。

タカミチからは遺体を持ってかえってきたことへのお礼を言われた。アスナちゃんからはガトウを救えなかったことへの言及があった。

「どうしてもつと早く来てくれなかったの!？」「レオンは治癒魔法得意なんですよ?ガトーさんを生き返らせてよ!」とかだ。

タカミチがアスナちゃんを止めようとしたけどオレがそれを止めた。ガトウが死ぬことになるのを知っていたのに一緒に行動していなかったオレに非があるし、ガトウはアスナちゃんにとつて父親代わりだったしね。紅き翼の他のみんなも父親代わりといえはそうだがガトウ以外は依頼や趣味とかで離れることがあったからだ。一通り泣いた後アスナちゃんはぐっすり眠った。

227

「タカミチ、これからどうするんだ?」

「僕は麻帆良で教師をしながらNGOに参加しようと思っています」

これは予想どおり。

「アスナちゃんは?」

「師匠の遺言もあるので記憶を封印して麻帆良に通わせるつもりです」

これも予想どおりだが、これについては例え遺言であるとしても認めるわけにはいかない。

「却下だ。」

「えっなんでですか!？」

タカミチはオレが反対したことが予想外だったようだ。

「例え遺言だとしても記憶を封印することには賛成出来ない。」

「どうしてですか!？記憶を封印すればアスナちゃんは辛い過去を忘れてこれからの人生を幸せに生きることが出来るんですよ!？」

「タカミチ、その考えは間違ってるぞ。今までの記憶を消すということは今までのアスナという人物を否定するということだ。言い方を変えれば殺すにも等しいんだぞ。」

「しかし、新しい人生を生きてもらうには必要のないものです」

「アスナちゃん自身に聞いたか？確かに辛い記憶もあるだろうが必要の有る無しを決めるのはアスナちゃんだ。記憶のみではないが彼女の意見を聞かずに勝手にオレ達で決めるのは傲慢だ。」

誰しも忘れたいことや思い出したくないことは存在する、でも過去はなかったことにできない。重要なことは、過去の経験を忘れずその経験を活かし、これからをどう生きていくかであるとオレは思っている。それにタカミチの言い方だと極端な話、殺人犯でも新しい人生を歩ませるために殺人を犯したことを忘れさせても良いことになる。

「それに幸せなれると言ったが幸せかどうかは本人しかわからないぞ。今のままでも十分幸せかもしれない。」

「……………すいません僕が間違っていました」

少し考えた後タカミチは謝ってきた。

「明日、アスナちゃんが起きたら記憶について聞くぞ。」

オレはタカミチに言い部屋に戻って寝た。

レオン side end

アスナ side

「んゝあれ？なんで私洋服のまま寝てたんだろ？……………あつガトーさんが死んじゃって……………グスツ……………」

また泣いちゃった……………昨日はレオンをひどいこと言っただよね私……………レオンも悲しいはずなのに……………

コンコンツ ガチャツ

「アスナちゃん起きてるかい？」

「あっうん起きてるよ。おはようタカミチ」

タカミチもいつもより元気がない気がする…

「おはようアスナちゃん」

「ねえタカミチ、レオン起きてる？」

「え？起きてるよ、どうしてだい？」

「昨日ひどいこと言っちゃったから謝りたくて・・・レオンも私たちと同じくらい悲しかったはずなのに」

「レオンさんはね数日間ずっと僕たちを探してくれてたんだって、だから探してくれていたことにお礼を、そして酷いことを言ってしまったことを謝ろうね」

「わかった言ってくる」

レオンがいるのはリビングかな？

〈アスナ side end〉

〈タカミチ side〉

少ししてリビングに行くとレオンさんとアスナちゃんがいた。アス

ナちゃんの様子をみるとちゃんとお礼と謝罪ができたみたいだ。レオンさんは僕に気付くとアスナちゃんの頭をなでていた手を止めた。手が離れた瞬間アスナちゃんが残念そうな顔をしたがレオンさんは気付かなかったようだ。

「タカミチも来たし朝ご飯にするぞ。アスナちゃんは顔洗ってきな、タカミチは椅子にでも座っとけ。」

「わかった」

「何気に僕の扱い酷いですね…」

「さて、アスナちゃんに聞かなきゃいけないことがある。」

「わたしに？」

朝食を食べ終わったあとレオンさんが話し出した。

「そっこれからについてだ。正確にはアスナちゃんがこれからどうするか…だな。突然なんだけどいくつかの案から選んでもらう。」

レオンさんはアスナちゃんがうなずいたのを見て案をあげた。

「1つ目、記憶を封印し一般人として麻帆良で生活する。これは魔法に関わること無く普通の人として過ごすことができる。ガトウが望んだのはこれだな。一般人として生活し普通に幸せになってほし

い…と、まあガトウの親心ってやつかね。あつ答えは最後に聞くからまだ言つなよ。」

「2つ目、記憶を封印せず魔法に関わり続ける。これは麻帆良で魔法使いの修行を、つまり魔法生徒として過ごしていくってことだな。」

「3つ目、魔法世界のアリアドネーで生活する。あそこはメガロメセンブリアもヘラスも介入できないから割と平和に生活できる。」

「どれを選んでもいいが、どの場合でもアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの名前は捨てて、かくらさか神楽坂 あすな明日菜として生きてもらう。ガトウのミドルネームを貰ってね。親代わりとしてはオレとタカミチがなることになってる。」

レオンさんの案を聞いたアスナちゃんの返事は早かった。

「2番目がいい！ガトーさんのこともナギのことも、もちろんタカミチやレオン、ラカンにアル、詠春のことも忘れたくない！」

「そうか、いいんだな？」

「うん。ガトーさんの気持ちはうれしいけどみんなのこと忘れたくない」

アスナちゃんの目には強い意志が感じられた。

「だとさタカミチ。」

「僕もそれがいいと思います」

「それじゃあアスナちゃんは部屋にいてくれる？こっちの準備がすんだら知らせるから。」

「わかった」

アスナちゃんが部屋に行くのとレオンさんが話しかけてきた。

「反対しなくてよかったのか？」

「はい、アスナちゃんの目は真剣そのものでしたアスナちゃんがあそこまでちゃんと自分の考えを言ったんですから僕は反対できませんよ。それと……」

僕はレオンさんに向き直って頭を下げた。

「レオンさんありがとうございました。アスナちゃんの記憶を消してしまおうとしたのをレオンさんが止めてくれなかったら取り返しのつかないことになるのでした」

アスナちゃんは僕たちのことを忘れてくれないと言ってくれた。これを聞かずに記憶を消していたらアスナちゃんの気持ちを裏切るところだった……

「顔上げるタカミチ。間違えを正すのは年長者として当然のことだ。それに……ガトウからお前とアスナちゃんのことを頼まれてるからな。」

そういうとレオンさんはアスナちゃんを呼びに行った。

くタカミチ side endく

くレオン sideく

オレはヘラスに来ている。アスナの学校が始まる前にテオドラにあいさつに来たのだ。

「というわけでしたら来ないから。」

「なにがというわけなのじゃ説明せい」

＝＝＝＝＝これまでのことを説明中＝＝＝＝＝

「つまりまた学生生活を送るといわけじゃな？」

高校と大学に通うつもりでいる。

「まあそうなる。来るのは長期休暇のときだけだな。」

「条件があるのじゃ！」

テオドラは顔を赤くしながらゴニョゴニョした。

「わ…わとp…………オ…するのじゃ」

「なに？声小さくて聞こえないんだけど。」

なんて言ってるかは想像できるけど顔を真っ赤にしながら恥ずかし

そうにし、犬耳がシユンと垂れ下がっているのが幻視できるのを弄らないでいられるか、いやいられない。 反語

「わらわと仮契約バクティオーするのじゃー！」

「いいぞ。そんならい。」

「………え？」

オレがあっさり許可したからかテオドラがフリーズした。その間にオレはさっさと契約の魔法陣を描く。

「ほらさっさと魔法陣入れや。」

「わ、わかったのじゃ」

描いた魔法陣の中にギクシャクしながら入ってくるテオドラ。

「テオドラが主でいいんだよな？」

「もちろんじゃ」

・・チユツ！

パアアアアアアアアアア！！！！

「よろしくMy master」

「むっ」

「そつだ、アスナのことは誰にも言つなよ。たとえ家族でも。」

「わかつておる 誰にも言わん」

レオン side end

記憶（後書き）

納得いくのがなかなかできず長引きました。一回丸ごと消しました。まあまあのお出来にはなっていると思います。

レオンのアーティファクトはそのうちだします。期待しないで待っててください。

エヴァンジェリン解放

麻帆良学園の学園長室に2人の人がいる。1人は、近衛 近右衛門。この麻帆良学園の学園長であり、関東魔法協会の理事を務める実年齢不詳の魔法使いである。特徴は異常に長い後頭部、噂では妖怪ぬらりひよんだとか…。もう1人は、レオン・D・オルレアンである。

「で何の用だよ爺さん。」

レオンがものッ凄くめんどくさそうに聞く。実は朝の5時で電話でたたき起こされたからだ。

「話はお主の仕事についてじゃ。」

「夜の警備員だろ？なんか問題あったか？」

実際はわかっているがあえて聞く。明日菜が中学2年になり、夏休みになったのだ、つまり3学期には原作の主人公ネギ・スプリングフィールドが来るのである。おそらく現2-Aの面子と面識があり、かつ紅き翼の一員であるレオンにネギのサポートをさせようとしているのである。

「いや、そのことではない。おぬしネギ君は知っておるな？」

「ああタカミチから聞いてるぞ。会ったことは無いがな。確か今年魔法学校卒業だったか？」

「実は、立派な魔法使い（マギステル・マギ）の修行でここ麻帆良

で先生をしてもらうことになっておる。そのサポートをお願いしたいのじゃ」

「何故オレなんだ？オレ以外に適任がいるだろ。マギステル・マギにしたいんだつたらガンドルフィーニや神多羅木、それか瀬流彦あたりの方がいいんじゃないか？」

レオンとしてはあまり関わるつもりはない。まあここで断つてもどうせ巻き込まれるだろうが…

「たしかに彼らは適任かもしれん…が、彼らだとネギ君を特別視しすぎてしまう可能性があるのではな」

「大戦の英雄サウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドの息子…か？」

レオンがそう言うのと近右衛門は真剣な表情で言う。

「そうじゃ、他の者ではどうしてもそのことを無視できんじゃろ。その点おぬしなら彼自身を見てくれると思つての」

近右衛門はレオンが肩書きや外見で人を判断しないところを評価している。そのことはエヴァンジェリンのことを他の魔法使いのように恐れたり排除しようとせず1人の女の子として接していることからもうかがえる。近右衛門もエヴァンジェリンとは一緒に囲碁をしたり酒を飲んだりする程仲が良い。実際接してみると危険はなくむしろ友好的であるというのに、『闇の福音』と言っただけで排除しようとする一部の魔法先生には頭を抱えているのだ。

しかし…

「いくつか条件があるけど受けてくれたらいいぜ。」

時々とんでもない条件を出してくるのは勘弁してほしいと思っている。

「なんじゃ？」

ここでレオンが上げた条件は4つ。

- 1つ、ネギ自身が気付くまでレオンや明日菜たちが魔法使いだということは伏せる。
- 2つ、サポートはしてやるが必要最低限のみ。
- 3つ、オレが教師を始めるのは2学期から。
- 4つ、エヴァの呪いを完全に解呪するのを許せ。

「まあとりあえずこんなもんか。」

「よいじゃろ エヴァは元々3年の予定じゃったのじゃ。しかし反発はあるぞ」

麻帆良には頭の固い「悪は滅ぼすべき」という魔法先生もいるのだ。レオンの説得やエヴァと実際話してみても考えを改めた者もいるが少数である。

レオンもそれくらい予想済みである。

「来週あたりにも全員集めて説明して納得させればいい。」

「わしがかのう？」

「もち。まあ爺さんの説得でも納得しないやつがいたらオレがどうにかするよ。」

レオンの笑顔を見ながら近右衛門は冷や汗をかいた。

「程々にの？」

「相手次第だ。」

会談はそれで終わった。

（エヴァンジェリン side）

私がサウザンドマスターに呪いをかけられ早14年たった。その間私は麻帆良の地でガキ共と一緒に中学を繰り返している。がそれほど苦痛ではない。もちろん、なぜ闇の福音と恐れられてた私がガキ共と…というのはあるがな。

でもそれを差し引いても私は今の穏やかな生活を気に入っている。初代従者のチャチャゼロ、去年クラスメイトの協力を得て作ったガイノイドの茶々丸、私のことを大切な家族と言ってくれるレオン、それと弟子で家族の一員である神楽坂明日菜と過ごす日常。あとは…タカミチや近衛のジジイと一部の穏健派（例、明石教授や瀬流彦など）の魔法先生か？

ちなみに呪い“登校地獄”は、レオンが半分ほど解いてくれた。正確にはナギのバカ魔力により歪んでしまった術式を治したらしい。図書館島で呪いに関する本を片っ端から読んで方法を見つけてくれ

たらしい。

「マスター、レオンさんがいらっしやいました」

「んあ？わかった今行く」

茶々丸の言葉に今日は何かあったか？と思いつつ出迎えると機嫌がよさそうな感じのレオンがいた。

「どうしたそんな顔して」

「エヴァの呪い解いていいことになったから解くぞ。」

「……………は？」

あまりに自然に重大なことを言われたので反応が遅れてしまった。

「だ〜か〜ら〜爺さんからの許可が出たから“登校地獄”の呪い解くぞ。」

「おい！それは本当か！？ついにこのふざけた呪いから解放されるのか？」

「おう、もちろん。爺さんと取引して許可得たから後はオレが解くだけ。」

取引？まあ後で聞き出すか。それより今は呪いだ。

「そつかではさっさと解け！さあ！」

「ほら落ち着け。解けないだろ？」

「う、うむすまん。では頼む」

私としたことがずいぶん騒いでしまったようだ。レオンが苦笑していた。

茶々丸も「マスターが嬉しそうに……」とか言ってるな。ポケロボが後で巻いてやる。

私に向かって伸ばされたレオンの手に膨大な魔力が集まる。それに伴い私の足元に魔法陣が現れ淡く発光を始める。

「え〜と、我 呪いを解く者なり 契約と制約の精霊よ 我の呼びかけに応え 彼の者エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを縛りし呪いの契約を破棄せよ」

パキヤンっ！！！！

魔法陣からの光が私を包んだ後何かが割れる音が響いた。

「ははっはははやったぞ。ついにあの忌々しき呪いから解放された！レオン感謝するぞ！」

「あゝ喜んでるとこ悪いが明日菜が中学卒業するまでは学校に通ってもらっぞ。」

「嫌だ。なぜそんなことしなければならん」

せつかく呪いが解けたのになぜいなければならん。

「実は3学期にナギの息子が麻帆^{マホ}良に修行しに来るんだよ。オレは

そのサポートを頼まれた、でその見返りとしてエヴァの解呪の許可を得たのだよ。それにエヴァもナギの息子に八つ当たりしたいだろ？自分の担当するクラスに吸血鬼の真祖がいたらビクるだろうな。」

「そういうレオンの顔はイタズラを考えたときの顔だった。」

「私自身も多少の恨みがあるからそれを晴らすには丁度いいだろう。」

「くっくくくつ悪だな」

「悪じゃないさ、ナギの代わりに報いを受けるだけさ。くっくくくつ。ナギが呪いを解きに来なかつたのがいけない。」

「こいつ私より性質悪いな…」

「あゝキティ、魔力持たてかれすぎたから少し寝させて。」

「それくらいかまわんど。茶々丸寝床の用意してやれ」

「わかりました」

「エヴァンジェリン side end」

「レオン side」

オレはエヴァと一緒に夜の顔合わせに向かっている。ちなみに夏休み最後の集会らしい。後1週間で2学期が始まる。明日菜には先に広場に行ってもらっている。

「爺さん来たぜ。」

広場につくと爺さんに声をかける。それと同時に周りの魔法先生・生徒から視線を受ける。

「待つとつたよ」

周りを見るとほとんどの関係者が揃っているようだ。もちろんタカミチもいる。

「知っておるものもいると思うが紅き翼のレオン・D・オルレアン君じゃ」

爺さんの説明で周りがざわめく。明日菜をタカミチと引き取ってからは数回しか集まりには出ていないので今の魔法生徒とは面識がない。魔法先生も近年赴任してきたやつはほとんど面識がない。とはいえっても大学などでお世話になっていた人もいるのでその人は特に驚いているようだった。

「それともう一つ言っておくことあつてのエヴァンジェリンの呪いじゃがレオン君が解いたからの」

爺さんの衝撃発言によりさらに騒がしくなる。

「今のは本当ですか学園長!?!」

「もちろんじゃよ何か問題あるかね？」

ガンドルフィーニが飛び出してきて爺さんに詰め寄るがあっさり返された。

「当たり前です！何を考えているのですか！？闇の福音を解き放つなんて！」

予想通りの反応ありがとうガンちゃん（笑）

「言いたいことあるんならオレに言えや。解いたのオレだしな。」

オレがそう言つとエヴァを指差しながら訴えてきた。

「闇の福音は真祖の吸血鬼で数々の罪を犯している凶悪な犯罪者です。すぐに排除するべきです。最低でも魔力を封印し悪事をできなくするべきです。麻帆良には守るべき一般人もいます。立派な魔法使いであるレオンさんならそれくらいのは分かっているでしょう！？」

「言いたいことは分かった。でもエヴァをどうするつもりもさせるつもりも無いぞ。」

「そんな！悪を放っておけというのですか！？」

「エヴァがお前たちになんかしたか？ここに住む人々に悪事を働いたか？」

「た確かに何もしていませんがそれは封印されていたからで……」

「たしかに封印されてたが悪事を働こうとすればできないことはないぞ？魔法を使わず悪事を働けばいいだけだしな。」

人を殺すのだって包丁で刺したりすればいいだけだ、魔法を使う必要はない。地味なのならスプレーで壁に落書きとかも悪事だろう。

「エヴァは夜の警備員をして麻帆良を守ってもいたんだぞ？魔力が封印されてるにも関わらず。」

オレの言葉で気付いた者もいるようだ。ガンドルフィーニも多少嫌悪の雰囲気が減った気がする。

「まあ別にすぐ理解しろなんて言わない、でもエヴァのことを少しでも分かってくれればいいと思っている。」

これでエヴァへの風当たりが良くなればいいな。それにしても昔は問答無用で黙らせてたんだが緩くなっただな…年か？

レオン side end

エヴァンジェリン解放（後書き）

上手く書けなくてすみません

副担任就任

レオン side

オレは2 - Aの教室の前にいる。

「じゃあ僕が呼んだら入って来てくださいね」

「おう。」

ガラッ

「みんな席について」

タカミチが声をかけると生徒たちが着席を始める。

「それじゃあHRを始める前に新しい副担任の先生を紹介するね」

タカミチがそついうとざわめきが広がる。

「うそっ私が知らないなんて」

「せんせー誰ですか」

「男？女？」

最初は朝倉で次は双子のどっちか、んで早乙女か？
相変わらず騒がしいな…廊下まではつきり聞こえるんだから他のク
ラスに迷惑だろ。

「今呼ぶから静かにね、それじゃあ入って」

やっとか…

ガラッ

オレが入ると静かになった。この後爆発しそうだな…

「えー今日からこのクラスの副担任になったレオン・D・オルレア
ンだ。担当は英語だ、高畑先生が出張で来られないときに代わりに
授業を受け持つことなる。よろしくな。」

し~~~~ん

あれ？

「「「「「「「…え？……………え~~~~~~~~つ!!」「」「」「」

うるせえ。でもドッキリは成功だなみんな驚いてる。

「ちよっ聞いてないわよ!」

当たり前だろ明日菜、言っでなかったんだから。

「わ〜レオ兄や」

木乃香、純粹に喜んでくれてありがとう。

「そんな…先輩は普通だと思ってたのに…」

千雨、すまないな普通じゃなかったんだわ。

「ほら他のクラスの迷惑になるから静かにしろ。質問は……フリ
ーにすると騒がしいから朝倉にさせるぞ。」

「はいじゃあ名前はみんな知ってるし…年齢を」

「20歳だ。」

実際は40は軽く超えてるがな（別荘での時間を入れれば）

「身長と体重は？」

「身長は178、体重は計って無いからわかんねえ。」

キロキロの実使えば体重1kg、1万kgまで自由自在だよ（笑）

「趣味は？」

「体を動かすことかな、あと料理。」

忘れているかもしれないがオレはワンピース内でできることは全て
できるのでサンジの料理を再現できるのだ。自分の作った料理を笑
顔で食べてくれるのは実に嬉しい。

「では最後にこの中で気になる子は！？」

この質問はテンプレなのか？

「ノーコメントで。」

「えーつままないじゃん誰でもいいから答えてよレオンさん」

朝倉、お前は…

「しいて言つなら木乃香、エヴァ、真名かな。」

大和撫子で天然、金髪幼女？でツンデレ、褐色巨乳でクール、より取り見取りだと思います…：すいません調子のりました。

「………おお〜」

オレが名前をあげた3人が赤くなってる。つってもオレからすればみんな妹みたいなものだけだな。

「それじゃあ時間が来たから授業に移るぞ。高畑先生お願いします。」

HRの時間が終わったのでタカミチにバトンタッチする。

「みんな授業始めるよ 教科書のP46を開いてね」

そのあとはタカミチの授業の仕方を見ながら過ごした。思ったこと、タカミチの教え方は上手い。

「はあっ！」

「『神鳴流奥義・斬岩剣』」

ダンッ　ダンッ

今は夜の警備員の仕事だ。キティは今日は休み。実際戦ってるのは明日菜、刹那、真名の3人だ。襲撃してくる悪魔や鬼には悪いが弟子である明日菜と刹那の修行にはもってこいなのだ。まあ爵位級や高位の鬼にはさすがにかなわないが召喚される方が珍しいからな。あっオレは楽勝よ？ナギクラスだとちょっと面倒だが…

おっ終わったか。

「おつかれさん。」

「レオンさんどうでしたか？」

刹那が今日の出来を聞いてきた。毎回その場で問題点や良い点を言ってる。

「刹那はまだ奥義を出した後に隙ができてるな。今日ぐらいのレベル相手なら問題無いだろうがもつと強い相手だと避けられたり止められたりした後には反撃食らうぞ。」

「はい！」

「次は明日菜だが……」

オレは黙って近づく。

「な何？レオン兄」

ちなみに明日菜はオレのことをレオン兄と呼ぶ。木乃香がレオ兄と読んでるのを聞いてこう呼ぶことにしたらしい。

ガツンっ！！

「つ~~~~~！」

オレは拳骨（覇気付き）を明日菜の頭に落とした。

「あほか！また敵に突っ込みやがって。何回言ったらわかるんだ。」

「だつて〜」

「だつて〜じゃねえよ。一人で敵に突っ込むのはナギやラカンみたいなバグキャラ指定を受けた奴ぐらいだ。今のお前には理不尽なくらいの強さはねえだろ。それに突っ込んだお前をフオーローしようとして刹那や真名が怪我するかもしれないぞ。気持ちが高ぶるの

はわかるが頭はクールにだ。」

「……はい」

「まあまあそれくらいにしなよレオンさん、神楽坂も反省してるし明日菜に説教してると真名が話しかけてきた。」

「…はあ、今度やったらサバイバル訓練（オレの襲撃付き）な明日菜。」

「げっ！」

オレの言葉で明日菜は冷や汗ダラダラである。刹那も内容を思い出したのか顔が青い。真名は苦笑いしてる。

「それにしても私たちのクラスの副担任をするってなんで言っておいてくれなかったんだい？」

「そうですよびっくりしました」

「そうよっ！いきなり入って来て今日から副担任ですなんてみんな驚いてたじゃない」

「言わなかったのはその方が面白そうだったから。副担任になったのは爺さんからの依頼だ。」

「一学園長（お爺ちゃん）からの？」

「そっ3学期にナギの息子が来るからオレにサポートしてほしいん

だとさ。」

明日菜の問いに答えると3人とも黙った。

「…ちよつとまってナギの息子つてまだガキじゃなかったっけ？」

明日菜がこめかみを押さえながら聞いてくる。

「数えて10歳らしい。」

「本当ですか？」

刹那が信じられないといった感じで聞いてくるが、現実残酷なのだよ。

「本当だぞ。なんでも2年飛び級して卒業したらしい。」

「それでレオンさんはサポートするために副担任に…つまりその子は私達の担任になるのかい？」

「えっ高畑先生は？」

「あいつは出張が多いから外れるらしいぞ。」

「そんな〜」

明日菜が崩れた（笑）

「サポートと言っても副担任としてのサポートしかないけどな基本的に。」

でました、門竜？ワイバーン。

「ウセロツ！！」

ドンッ

ズシャン！

めんどいから覇気で気絶させる。

「相変わらず凄い気迫ですね」

奥の扉からアルが出てきた。

「久しぶりだなアル。」

「ええお久しぶりです 中へどうぞ」

にしても力落ちたな、なんか髪の色も薄くなってるし…

「でなんでこんなところにいんだ？」

「休養中でした もう9年もここで食っちゃ寝してます」

「9年もいるなら連絡ぐらい入れろよ。それにしてもなにがあったんだ？……」
「って聞いてもどうせ答える気ないよな、お前のことだ。」

結構秘密主義だからなこいつ。

「その話はいづれしますよ。それにしてもレオン、アスナ姫の記憶封印しなかつたんですね」

「意外か？」

「いえ貴方の考え方は分かっているつもりですから、過去は無かつたことにはできないと言つたところでしょうか？」

マジで分かつてるんだな…

「さすがは他人の人生の収集が趣味なだけはあるな。あつそつだ、タカミチにはここにいるの教えないのか？」

「まだ教えるつもりはありません。もちろんアスナさんやキティにも教えないでいただきたい。私がここにいるのを知っているのは学園長だけですから」

「お前がそついうなら黙つとくが…ばれたときがめんどそつだな。」

オレが文句言われそつだ。

オレはため息を吐きつつもだされた紅茶を口に飲む。

「ところで学園祭のときに見かけたのですがキティが成長していらんですが…」

「オレが成長させた。悪魔の実の力だな。」

「小さいままの方がかわいらしいのに…」

アルは心底残念そつにしている。

その後もだいぶ話し込んで帰らないといけない時間になった。

「じゃあなアル。」

「ええ暇なときは何時でもいらしてください歓迎しますよ。」

「ああ最後に聞きたいんだけどナギのバカは生きてるよな？」

「ええ何処にいるかはわかりませんが生きていることは確実です。彼とのカードが生きていますから。」

そう言つて仮契約カードを出してきた。どうでもいいんだけどあの袖の下はどうなってるんだろう？どう考えても要領を超えたものが出てくるんだよな、影の倉庫にでも繋がってるのかな？

「そうか生きてんならいいや。またな。」

レオン side end

明日菜 side

今日はレオン兄の別荘で修行だ。刹那さんも一緒に来ている。レオン兄の別荘は魔改造されていて凄い。最初は南の島だけだったらしいけど今はいろんな環境や施設がある。環境は雪山、火山、密林、大海原、草原、砂漠、施設はプール、船着き場、海列車、研究所兼工場、博物館、といろいろある。レオン兄が言うには昔やったゲームを再現しているらしい。

私の武器は日本刀で銘は「淡雪」で業物と呼ばれるほど良い刀だ。刹那さんの武器は野太刀「夕風」。昔、詠春さん（レオン兄から呼び捨てにしないように言われた）が使っていたものだ。

「レオン兄、来たわよ」

来るように言われたフィールド・密林・に来たけどレオン兄が見当たらない。

「いませんね」

おかしい…いつもは先にいて待ってるのに……

「嫌な予感がするんだけど…」

「明日菜さんもですか・・私もd「避けてっ!」「っ!」

ズドドンツツ!

寒気を感じて横に避けるとさっきまで私達がいた所に斬撃が飛んできて地面を軽く抉った。

「ちよっ」

「来ます!!」

文句を言いたかったが刹那さんの言うとおり次々に斬撃が飛んできたので迎撃に移る。

おそらく…いや間違いなくレオン兄の飛ぶ斬撃だ。これは魔力や気で作られたモノでないから私の魔法無効化マジックキャンセルでも消せないからやっか이다。刀で受け止めるか避けるしかない。もしくはこっちも斬撃を飛ばせばいいが、私はまだ飛ばせない。
にしても……

「多すぎるわよ~~~~!!!!!!」

キンッ キンッ キンッ

刹那さんと協力してなんとかしのいでるがちょっとでも気を抜くと対処しきれなくなる。

前後左右から次々斬撃が迫ってくる。

「はあっ!!」

「やあっ!!」

「グッ……」

ついに斬撃の衝撃に耐えきれなくなり刀を弾き飛ばされてしまった。

「はいそこまで〜。」

すると斬撃が止まり、レオン兄が木の間から姿を現した。

レオン兄もそうとう動いた（斬撃を飛ばすため）はずなのに息1つ乱してない。それに比べて私と刹那さんは大なり小なり傷を負いボロボロ。

「今ので約5分な。だいぶもったな。」

5分！？てつきり十数分はやってると思ったのに…。

「じゃあ休憩がてらに話でもしようか。」

レオン兄はそう言うと岩と一枚の紙を背後の空間から取り出した。毎回思うんだけど便利よねあれ、荷物持たなくていいし。

「さて、それじゃあ聞くけど優れた剣士の証って何だと思う？」

うーん、負けないことかしら？

「なんでも斬ることができることでしょうか？」

「半分正解かな。優れた剣士の証は、何でも斬ることができ、何も斬らないことができることだ。」

「何でも斬って何も斬らない？」

どういうことだろ？隣を見ると刹那さんも考え込んでるみたいだ。

「技名でわかりやすく言うと神鳴流の『斬魔剣・弐の太刀』が良い例だな。」

「ねえ刹那さん『斬魔剣・弐の太刀』ってどんな技？」

刹那さんは私の問いにすぐに答えてくれた。

「はい、『斬魔剣・弐の太刀』は取り憑いた悪霊などの悪霊のみを切り伏せる技です」

レオン兄はその説明を聞いて満足そうだ。

「そう、そのためには取り憑かれている人は斬っちゃいけない。つまり斬るものを選ぶってことだ。」

たしかにそうよね救うはずの人を斬っちゃダメなもの。

「レオン兄は何も斬らないことができるの？」

「もちろんできるぞ。」

レオン兄はそう言うと言っていた紙を空中に放り右手に持っていた刀‘和道一文字’を紙に向かって一閃した。

ズバンツッ!!

しかし紙は斬れておらずそのままだった。

間違いなく刃で斬ったはず、でも斬れてなかった。

レオン兄は次に岩に刀を振り下ろした。

ストンツ

「「え?」」

軽く振り下ろしただけで岩がきれいに斬れた。何の抵抗もなく斬れた感じだった。

「とまあこんな感じに斬るものを選ぶことができる。最終的には2人にもこれができるようになってもらいたい。もちろん気や魔力を使わずにな。まあまだまだその段階じゃないけどな。」

「『最強の剣』とは……守りたいものを守り、斬りたいものを斬る力。それを忘れるなよ。」

私にはそう語るレオン兄のことをかっこよく思った。

「はい」

それは刹那さんも同じようだった。

「じゃあ休憩終了ということで次はこの紙に書いてあることね。」
レオン兄がだした紙にはメニューがびっしり書いてあり、目眩がした。

「心配しなくても大丈夫だぞ。ちゃんとギリギリでこなせる量しか書いてないから。」

それからのことは思い出したくない……………ガクガク……………

明日菜 side end

ネギ来襲（笑）

レオン side

オレは今、学園長室にいる。2月となり今日からネギがやってくる日だからである。明日菜と木乃香が迎えに行っているはずである。もちろん寝坊してなければ…であるが。

ドタバタ ドタバタ

来たか。

バタンツ！！

「学園長！」

明日菜が走りこんできた。何故にジャージ？……あつ武装解除の暴発か！でも魔法無効化は？……もしかして無意識の暴走だから敵対意識が無いから反応しなかったのか？もしくはエロ補正か？

「明日菜くん、どうしたのじゃ？」

明日菜は爺さんの問いにマシンガントークで答えていく。一応簡単な情報は教えといたはずで納得もしてたから平気かと思ったがよっぽど 武装解除 + 失恋の相がでてますよ（たぶん） が頭に来たみたいだな。

「おはよう木乃香。」

「おはようレオ兄！」

口論が続いてる間に後ろにいた木乃香にあいさつする。

「明日菜はなんであんなに怒ってるんだ？」

「あんな〜ネギ君が明日菜に失恋の相が出てるって言ってしもうたんよ」

明日菜はタカミチに恋愛感情を持ってる、って言ってもオレからしてみればLOVEではなくLIKEだ。明日菜はそのことには気づいてないが…

「あ〜そりゃ怒るは。」

やっぱり言ったかネギ…そう思いつつネギを見ると、ネギはネギで明日菜が怒ったことに不満タラタラの顔をしている。それとネギの首にオレ特製の紅き翼アラルツラネックスがかかっている。ネックスのチエーンの部分しか見えないが特殊な形をしているから間違いないだろう。ナギがあげたのかな？

「ネギ君」

「はっはい！」

「修行は大変じゃぞ。やり直しは無しじゃ。しっかりやるように」

爺さん、一般人いのかの前で修行とか言うなよ。まあ実際はばらす気満々だろうけど。

「はっはい！がんばります あんまりその男性は？」

オレ？

「ああそうじゃった彼は君が担当するクラスの副担任をしてもらっておるレオン・D・オルレアン先生じゃ。クラスでわからないことがあつたら彼に聞くように」

おい爺さんさりげなく押しつけんなよ。面倒だろ。

「よろしくスプリングフィールド先生。」

「よつよろしくおねがいます」

「それと指導教員のしずな先生じゃ」

「よろしくね」

しずな先生いつの間？

その後原作どつりネギは明日菜と木乃香の部屋に寝泊まりすることになった。

で、クラスに向かつてるのだが、ネギは緊張してガチガチ、明日菜と木乃香は先に教室へ、しずな先生はガチガチのネギを見て微笑んでる。

ときどきネギに向かって殺気を向けてるのだがいつこつに気付く気配がない。原作ではよくこれが本国最強クラスまで強くなったよな…

「ネギ先生着きましたよ。ここが貴方のクラスです」

「わあ〜」

ネギは窓から中を覗いてる。どうでもいいことだけど覗いてたら犯罪だよな。ぱつと見怪しいもん。

ああクラス名簿渡すんだつたな。

「スプリングフィールド先生、これがクラス名簿です。」

ペラ

オレの渡したクラス名簿を見てさらに緊張するネギ。それにしてもわざわざコメント書いてあるんだな。ママだなタカミチ。

ガラッ

ひゅっ…フワッ…ポフン

みごとに障壁で受けとめたな、彼の日常は常に障壁を張って無いといけない程危険なのか（笑）

バインツ ガボンツ パスツパスツパスツ ドンツ

見事に全部のトラップにかかったな。あいかわらずこの連動トラップ凄いな。

双子と美空だよな考えてんの。トラップ考えるくらい熱心に勉強し

てくれないかな

「「「「「え？子供~~~~~!!!!」」」」」

「大丈夫？」

「ゴメン新任の先生かと思って」

そこでまた騒がしくなるのをしずな先生が沈める。ん？オレ？オレはこっそり後ろの扉から入って教室の後ろに立ってるよ。騒ぎに加わるのは面倒です。

「ええと…その…ボボク 今日からこの学校でまひ 英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。3学期の間よろしくお願いします」

「………キヤア~~~~~かわい~~~~~」

あ~~~~るせ〜。しかも魔法って言いそうになっただろ…

……クイクイ

「ん？どうした千雨。」

「レオンさん、マジですか？」

「マジなんです。」

「そんな…」

Orz状態になる千雨

「愚痴ならいつでも聞いてやるから耐える。」

2学期が始まってから少しして千雨から、周りとの価値観の違いについての相談を受け、真摯に対応して不安とかを解消してあげた。魔法のことは伝えてないが感じている節はある。まあ別段問題は無い。万が一に備えて命の危険が迫ると簡易結界を張るキーホルダーを渡してあるし。

その後無事に授業も終わって放課後になった。なんでも教室でネギの歓迎パーティーをするらしい。オレはエヴァと椅子に座って待っている。もちろん会話内容が世間話に聞こえる魔法を使ってる。

「おいあんなのが本当にネギの息子なのか？魔法は暴発させるし教育がなくて無いんじゃないか？」

エヴァの声色には呆れが含まれてる。

「まあしかたないわな、周りからは英雄の息子としか見られず本人も気づかないうちにその期待にこたえようとしてる。それにおそらく悪さしても・ナギ譲りの悪ガキだ・とかで叱られもせず過ごしてきたんだろ、今朝の明日菜とのちょっとした騒動も本人は・親切にしたのになんで怒られなきゃならないんだ・とか思ってるみたいだしな。魔法以前の問題だよ。」

「ふんつくだららない　ところでなんで魔力が下がってるんだ？昨日までは普通だったのに」

「そりゃ面倒事に巻き込まれないように一般人でいるつもりだからな、認識障害も使ってるし。それに普段から魔力使わないから別に変化ないんだわ。」

悪魔の実は便利だ。とは言っても・・

「結局レオンは巻き込まれるだろうがな　ククク」

だよな〜

レオン　side　end〜

ネギ　side〜

「ううう失敗しちゃったな〜」

修行のために麻帆良学園に来て先生になっただけどミスしちゃった。

「それにしてもひどいな〜」

神楽坂明日菜さん、朝も親切で占いの結果教えてあげたのに頭わしづかみされるし・・・学園長先生から神楽坂さんと近衛木乃香さん

の部屋に泊まらせてもらうことになってるけど泊めてくれないだろ
うなぐ、どごしじよづ。

ふらふら よろよろ

「あれ？あれは出席番号27番の宮崎のどかさん、あんなに本持っ
て危ないな」

足踏み外さなければいいけど…

クキッ

「きやつ」

「やつぱり」

『ウエンテ
風よ』

ブワア

ズシャー

ふう、怪我がなくてよかった。

「なっ！」

「え？」

宮崎さんを魔法で助けた後、声がする方を向くと神楽坂明日菜さん
がこつちを見ていた・・・もしかして見られた？

くネギ side endく

く明日菜 sideく

がしっ

「あんた何者？」

私は道のそばのちよつとした林でネギを問い詰めてる。宮崎さんを助けるのに魔法を使ったのは怒って無い。でも使ったことで起こる問題（一般人に見られる等）をちゃんとわかっているか聞くためだ。昼間も魔法を暴発させていたからなおさらだ。

「えっ、いやその・・・」

「はつきりしなさい」

まさか自分から魔法使いつてばらさないわよね（汗）今ならいくらでも誤魔化せるし

「ああの僕は魔法使いで・・・」

アウト…せめて超能力者とか言いなさいよ……

「で、その魔法使いがなんているのよ」

「『マジステル・マジ偉大な魔法使い』になるためです」

「マジステル・マジってなによ」

知ってるけどね

「世のため人のため陰ながら魔法を使う魔法界で最も尊敬される仕事の一つです」

「ふ〜ん」

昔、私を利用しようとしたのもマジステル・マジの一勢力だったけどね。レオン兄達が助けてくれたけど…

「実は僕はそれになるための仮免期間中みたいなものでして、ばれたの内緒にしてください、でないと…」

「でないと？」

私がそう言うと途端に泣き顔になった。

「仮免没収されて連れ戻されちゃいます。ひどい時にはオコジヨにされちゃったり〜」

毎回思ってるんだけどなんで罰がオコジヨになることなんだろう…

「そんなの関係無いわ」

「うう仕方ないですね、こうなったら記憶を消させてもらいます」

「えっ!?!」

確かに記憶を消すのは処置の一つだけどこころいう場合って学園長とおじいちゃんかに連絡して支持を仰ぐんじゃないの？

「むにゃむにゃ・・・記憶よ消えるー」

バシユウ・・・

「君たち何をしているんだい」

「きゃあー!」

なんで服だけ消えるのよ~~~~!!!!
最悪、サイアク、災厄、サイヤク、高畑先生にみられた。

く明日菜 side endく

ネギ来襲（笑）（後書き）

大学が忙しく更新できませんでした。さらに今回はいまいちなので
そのうち追加・修正します。

ネギへの試験（前書き）

今まで更新できずにすみません。実に3か月半ぶりの更新となります。

ひさしぶりなので短いです。

ネギへの試験

レオン side

オレは学園長室にいる。ちなみにあと少しで期末テストだ。

「ネギ君の様子はどうかね」

「初日から明日菜に魔法バレ、武装解除の暴発十数回、」

武装解除はなぜか明日菜が近くにいる時しか起きないらしい。明日菜の幸運はネギが近くに来ると下がるのかもしれない（エロ限定）
オレが報告していくと爺さんから汗がダラダラ垂れてくる。

「禁止されてる読心術の使用、違法である惚れ薬の精製、および使用、」

もう擬音が聞こえてくるぐらい汗をかいている爺さん。
惚れ薬はオレが見ついた（刹那からの連絡により急行）ときにはすでに遅く、しょうがないから覇気で気絶させた。オレはその処理をおこなうしかなかったのでネギのことは明日菜に任せた。宮崎がネギにキスしようとしたところを寸で取り押さえたいらしい。

ちなみに高校生とのドッチボール対決は3 - Aが余裕で勝った。明日菜がボコボコ当ててた。

「以上のことからウェールズにさっさと送り返して魔法学校からやり直させたほうが麻帆良、しいては魔法界のためかと。さっさとオコジョにしたら？」

「むう相変わらず厳しいのう」

「事実を言ってるだけだ、それに特別扱いしないように言ってきたのはそっちからだ。」

「しかしここで送り返すと本国の方がな・・・」

ああ元老院か・・・ネギはいい広告塔だからな。今ネギを戻すと良いように操られるだけか。ナギみたいに

抗う力もないし。ここでネギを失うのは正直に言っただけだから・・・いろいろと

「はあ〜今回は特別な。」

オレがそう言つと爺さんの顔が明るくなる。元老院からの圧力、関西呪術協会とのいざこざ（これは詠春の力不足もあるが）等いろいろ大変だからな。

「でも当然ネギにはペナルティを後で受けてもらうぞ。さすがにノータッチにはできない。」

「それはしかたないのう」

「まずは爺さんからの注意な。魔法使いの先輩としてこれ以上は見過ごせないとも言え。それから春休み中にせめて魔力のコントロールはできるようにさせろ。明日菜をこれ以上脱がさせるわけには

いけない。ああと世間の一般常識教えた方がいいぞ。疎すぎる。」

「うむ、あいわかった」

「で、ネギの最終課題は？」

「期末テストで3・Aの最下位脱出じゃ」

ネギファイト〜

〜レオン side end〜

〜明日菜 side〜

「え〜と今日のHRは大勉強大会にしたいと思います」

今日の最後の授業のHRでいきなりネギがそんなことを言ってきた。なんで？

「あのっそのっ実は今度の期末テストで最下位を脱出しないと大変なこと〜」

大変なこと？レオン兄に聞いてみよつと。

〜レオン兄〜

私は教室の後ろにいるレオン兄に念話をした。

「ん？どうした明日菜。」

「ネギが言ってる大変なことって何？」

「最下位脱出しないと春休み中毎日新田先生の補習「え」じゃなくてネギがクビになる。」

「ちょっと、びつくりさせないですよ。あれ？でもこれでネギがクビになれば私の負担なくなるんじゃないやあ・・・」

「明日菜「わざと成績落としたり・・・わかってるな？」」

「ビクッ！！！」

「もっもちろんよ」

「ならいい。」

「ふう、頑張ってる勉強しないとね。」

「はい 英語野球拳がいいと思います！」

「椎名何言ってるの!？」

「明日菜 side end」

くネギ side

僕が勉強をさせようとするのと椎名さんが英語野球拳というものを提案してきた。

むむ、ベースボールを取り入れた勉強法なのか・・・なんとなく面白そうだぞ。よしここは生徒の自主性に任せてみよう。

「じゃあそれで「ダメだから。」え？」

僕がOKを出そうとしたらレオン先生に止められた。

「ふざけてないで普通に勉強しろ。超、宮崎、葉加瀬、雪広、朝倉、木乃香、那波、明日菜は分担して他の人に教えてくれ。オレは少しスプリングフィールド先生と話があるから。」

レオン先生はそう言うのと僕を教室から連れ出した。

「せっかくの生徒からの提案なのになんでダメなんですか？」

僕が訴えるとレオン先生はため息を吐きながら僕に説明してきた。

「スプリングフィールド先生、野球拳って知ってます？」

「いえ知りません。でも野球についているので野球をしながら何かするのでは？」

「はあ、野球拳って言うのは、ジャンケンで負けた人が服を脱いでいく遊びです。」

「え・・・」

レオン先生が言ってることは本当っぽい、つまり・・・

「もしあのまま進めていれば教室内で生徒が服を脱ぎ、私達2人はそれをおこなわせた変態教師として問答無用でクビですね。生徒から言いだした、野球拳を知らなかったは通用しません。」

それを聞いた瞬間、僕の顔から血が引いて行くのがわかった。

「あっありがとうございます。もし止められていなかったら大変なことになることに・・・」

「今度から気をつけてくださいね。あっそうだこれクラスの成績です。目を通しておいてくださいね。先に戻ってますね。」

レオン先生はそう言うので僕の頭をなでてクラスに戻って行きました。

お兄ちゃんってあんな感じなのかな？・・・

「はっいけないいけない クラスに戻って勉強教えなきゃ」

（ネギ side end）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9943j/>

ネギま！～海の秘宝を宿し者～

2011年10月5日01時47分発行